

三塚鶴田

長野県佐久市三塚鶴田遺跡発掘調査報告書

昭和51年3月

長野県佐久市教育委員会

序 文

(三塚鶴田遺跡に佐久平の実相を偲んで)

佐久市教育長 細 萱 勇 美

野沢平の中心、三塚鶴田遺跡調査に挑んだのは昭和50年5月17日より5月26日まで続行された。時あたかも夏の気配漸くきざして快適な候ではありましたが我々はこのただずまいを堪能は許されません。発掘調査の使命と時間に迫られているからです。

団長に藤沢平治先生を懇請し、錚々たり調査員は既に発掘に百戦錬磨の学会の権威を網羅したスタッフの自信満々の士、時至り人を得、時を得た万全の態勢にて調査は開始されそして素晴らしい調査結果を得ました。

協力は地元桜井地区のメンバーの参加により一層の強力な布陣がしかれた次第です。

次々に検出されました遺構は住居址4軒、これは国分期、土壌三期に歴然たる検証でありました。

この空間に人滅び又人おこり、自然の摂理の反覆の中に断えることのない時の連続が行われてきたことを思うとき佐久平の悠久さに粟粒の如き人の命のはかなさと共に又断ち難い連続の哲理さえ覚えました。

この爐辺に人は何をか語り、糧に耕しを知り、中央権力とその反応をどのように思い受け止めていたのか。

茫々たり興亡の時を送り、新たな時の流れの中に生きることを求めていったかが遺物の息づきの中に訴えられその心の琴線に触れる思いもいたしました。

灰釉陶器、土師、須恵、鉄鏃、は現代の生活をこれらの遠い道志が志向してくれたのだと思うとき、掌にこれを載せて時こそ無なりと何か気が遠くなり茫失の感さえしました。鶴田調査は本当に造成される近代生活への約束の団地化への動機ですが、ここに人生れ又人滅び又新しい生の誕生への住居地であり、やがて歴史を創生することを思うとき、何か輪廻への因果を感じます。

佐久よ永遠なり、鶴田遺跡はその永遠の非連続の一断面が宅造により顔をみせたものでしょう。

所感の一端を述べ、団長藤沢先生、考古学会員のいつもながらの一致協力のお力添え、桜井地区有志のみなさんに満腔の謝意を捧げ郷土への認識を更に深める機会として調査の意義を評価していただきたいことを祈念してご挨拶、御礼といたします。

例 言

- 1 本書は、昭和50年5月17日～26日までにわたって発掘調査された、長野県佐久市大字三塚字鶴田に所在する三塚鶴田遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、社団法人佐久市開発公社の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、藤沢平治を発掘担当者とし、佐久考古学会有志を調査員とし、地元桜井地区の方々の協力を得て実施した。
- 4 本書に挿入した遺構、遺物の実測図作成は、調査員全員が行ない、トレスは林幸彦、島田恵子が担当した。
- 5 本書に掲載した写真は、青木幸男、高村博文、林幸彦が撮影したものをを使用した。
- 6 本書の執筆は、発掘および整理担当者が行ない、文末にそれぞれ文責を記した。
- 7 本書の編集は、島田恵子、林幸彦、青木幸男が行ない、藤沢平治がこれを校閲、監修した。
- 8 本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また、白倉盛男、坂野和信、土屋長久、臼田武正氏からは、報告書作成に関しいろいろ御助言をいただいた。また、長野県教育委員会、桐原 健、丸山敞一郎指導主事には、調査に関し適切な御指導をいただき、更に地元の方々からは、物心両面にわたる御援助を賜わり厚く御礼を申し上げます。

凡 例

1 各遺構の略号は次の通りである。

住居址——H、 土壇——D

2 住居址実測図の縮尺は $\frac{1}{50}$ 、土壇の縮尺は $\frac{1}{20}$ である。

3 土器、石器実測図の縮尺は $\frac{1}{3}$ 、鉄器製品の縮尺は $\frac{1}{2}$ である。

4 土器一覧表において残存部位、および口径、底径の残存度によって分類し表記してある。また法量は、上段—口径、中段—高さ、下段—底径、の順である。()内は復元によって得た数値。

土器実測図の分類 P——完全実測、R——回転実測、F——破片実測、

土器破片の分類

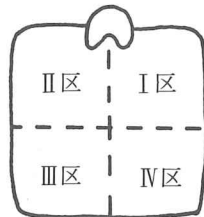
- | | | |
|--|------------------------------------|---------------------------------------|
| A 口辺部、底部破片で
口径、底径が $\frac{1}{4}$ 以上
を有する破片 | 1 全部位が存在するもの
(口辺部~底部まで連
続する) | 1 完形 (A 11) |
| | | 2 口径と底径が $\frac{3}{4}$ 以上 (A 12) |
| 2 全部位が存在しないもの | の | 3 1、2以外の個体 (A 13) |
| | | 1 口径または底径が $\frac{3}{4}$
以上 (A 21) |
| B A以外の破片 | 1 特筆すべき破片 (B 1) | 2 1以外の個体 (A 22) |
| | | 2 1以外の破片 (B 2) |

なお、高台を有す器形の底径は、高台部を除いた数値である。

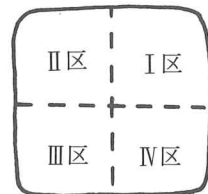
5 各遺構断面図の水系レベルは統一してある。

6 図版中遺物の縮尺は、土器、石器等すべて約 $\frac{1}{3}$ であり、土器、石器番号等を簡略した。例えば第3図3は3-3と表わす。

7 住居址内出土遺物の平面的位置は右記の例に従う。



〈カマドが明確な時〉



〈カマドが明確でない時〉

本文目次

序文	
例言	
凡例	
本文目次	
付表目次	
挿図目次	
図版目次	
I 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る動機	1
2 調査の概要	2
3 調査日誌	2
II 遺跡の環境	4
III 層序	7
IV 遺構と遺物	8
1 住居址	8
1) H 1 号住居址	8
2) H 2 号住居址	14
3) H 3 号住居址	16
4) H 4 号住居址	19
2 土 壙	21
V 総括	24
引用参考文献	29

付 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	4
第2表	H1号住居址出土土器一覧表	13
第3表	H2号	15
第4表	H3号	18
第5表	H4号	21
第6表	三塚鶴田遺跡住居址一覧表	24
第7表	三塚鶴田遺跡出土土器一覧表	27

挿 図 目 次

第1図	位置及び設定図	1
第2図	周辺遺跡分布図	6
第3図	三塚鶴田遺跡層序模式図	7
第4図	H1号住居址実測図	9
第5図	H1号出土遺物実測図	11
第6図	H1号	12
第7図	H2号住居址実測図	14
第8図	H2号出土遺物実測図	15
第9図	H3号住居址実測図	16
第10図	H3号出土遺物実測図	17
第11図	H4号住居址実測図	19
第12図	H4号出土遺物実測図	20
第13図	D1、2号土壙実測図	22
第14図	D3号土壙実測図	23
第15図	三塚鶴田遺跡遺構全体図	25

図 版 目 次

- 図版一 遺跡全景（南方より）
- 図版二 1 H 1号住居址全景（南方より）
2 H 2号住居址全景（西方より）
- 図版三 1 H 1号住居址の出土遺物
- 図版四 1 H 3号住居址全景（南方より）
2 H 3号住居址カマド（南方より）
- 図版五 1 H 4号住居址全景（南方より）
2 H 3、4号住居址の出土遺物
- 図版六 1 D 2号土壙全景
2 D 3号土壙全景
- 図版七 1 発掘調査スナップ
2 発掘調査スナップ

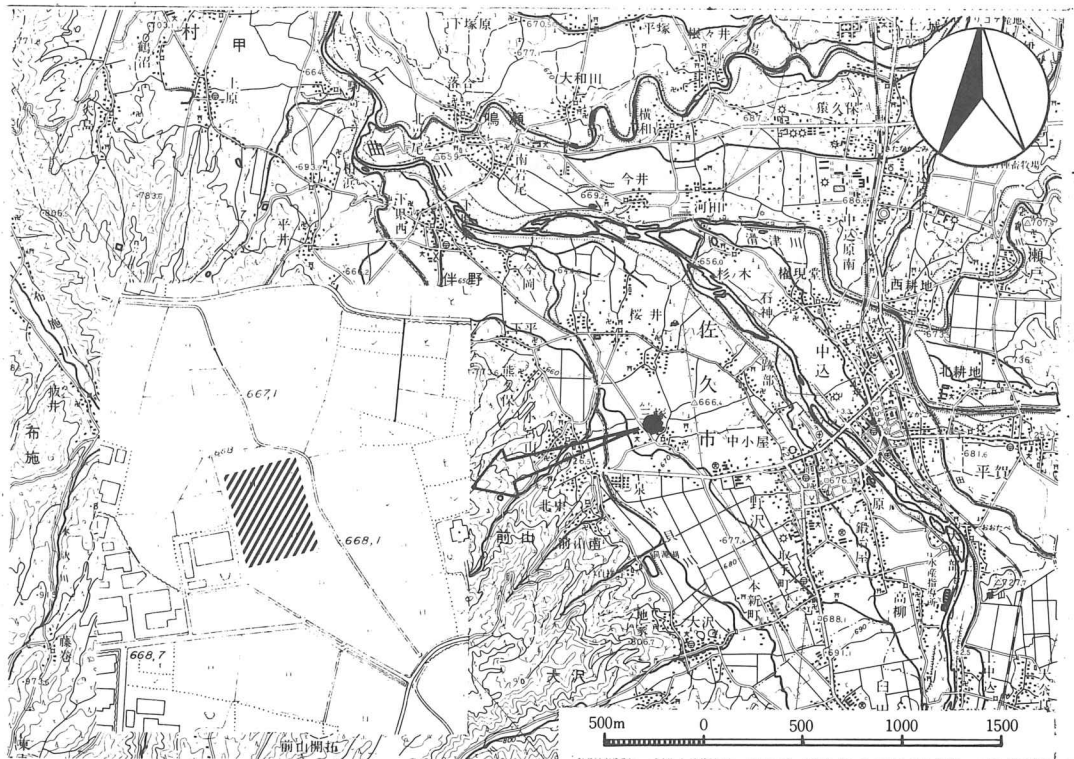
I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

佐久市大字三塚鶴田遺跡は三塚部落の北西に位置し、自然堤防上 668m の地点に存在する。すでに調査、報告がなされている三塚遺跡、三塚町田遺跡、跡部町田遺跡、市道遺跡とともに三塚遺跡群を構成する一遺跡としてかねてから注目されてきた。

本遺跡は昭和50年市営宅地造成の工事に伴ない、破壊を余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存を要するに至った。

佐久市教育委員会は発掘担当者に藤沢平治氏を依頼し、佐久考古学会有志の協力を得て、5月17日より発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 遺跡の位置及び設定図

2 調査の概要

- 遺跡名 三塚鶴田遺跡
- 所在地 長野県佐久市大字三塚字鶴田
- 発掘期間 昭和50年5月17日～同年5月26日
- 調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

細萱 勇美	佐久市教育委員会教育長
小林 栄一郎	〃 教育次長
高畑 五男	〃 社会教育課長
桜井 長夫	〃 社会教育係長
木内 捷	〃 社会教育係
高村 博文	〃 文化財係

- 調査団の構成は下記の通りである。

団長 藤沢平治

調査員 武藤 金、森泉定勝、三石延雄、井上行雄、佐藤 敏、森泉好治、島田恵子
林 幸彦、青木幸男

協力者 細萱かつ子、細萱ひさし、白田靖子、白田てい、花里百合子、井出ふくえ

3 発掘調査日誌

○5月17日(土) 小雨

午前、調査団一同により現場での打合せ会
終了後、木内捷社会教育係、青木幸男調査員
立合いのもとで、ブルドーザーによる水田表
土の削平を行なう。

南北にA～Hまで(北側拡張区は便宜上Z
と呼ぶ)、東西に1～8まで3×3mを単位と
するグリッドを設定する。

遺構の分布状況を手早く把握する為、1、
3、5-E、6-G、2-Dとグリッドを一
つ間隔置きに発掘を開始する。午後になって

遺構と想定されるプランの一部を確認する。

尚、発掘設定区域内の土層確認のため、1
-Eは深く掘り下げている。以下土層観察よ
り得られた遺物包含層は表土下20cmに想定さ
れるが、水田耕作による遺構上部へのカク乱
も考慮される。

○5月18日(日) 晴

昨日に引き続き、5-E内において確認さ
れた落ち込みの全容を追求する為に3、4、
5-D、4-Eグリッドの掘り下げを行なう。
並行して、6-B、D、Gの掘り下げを行な

う。

○5月19日(月) 雨

雨天のため、本日の作業を中止とする。

○5月20日(火) 晴

3、4、5-E及び3、4、5-D内のグリッドにおいて確認された落ち込みは、ほぼ一辺4mを計る住居址にまとまるようである。

本遺構をH1号住居址とし、以後プラン検出作業に入る。

尚6-C、Dでは円形の土壙状遺構を確認する。

○5月21日(水) 晴

H1号住居址のプラン検出を続行、ほぼ床面まで精査を終える。7-B、C、8-Cのグリッドにかけて確認済みの落ち込みH2号住居址のプラン検出も並行して進められる。

ただし農道にはばまれその完掘はみていない。

○5月22日(木) 晴

H1号住居址の床面再精査と付属施設の検出を行なう。遺物はカマド想定部を中心に北壁寄りに偏在する傾向がみられる。

2、3、4-A、2、3、4-Bのグリッドの掘り下げ開始。重複する二軒の住居址にまとまりそうである。

○5月23日(金) 晴

二軒の住居址はその新旧関係よりH3、H4号住居址とされる。南壁の一部を切り込んで存在するH3号住居址のプラン検出から始める。

○5月24日(土) 曇

H3号住居址のプラン検出を終了する。

写真撮影及び実測作業終了後、H4号住居址に取り掛かる。

○5月25日(日) 晴

H4号住居址のプラン検出を終える。6、7-Bで確認された土壙状遺構D₁、D₂及び6-C、DのD₃を検出する。いずれも出土遺物は皆無であった。清掃写真のち、実測に移る。土壙の性格は明らかではない。

○5月26日(月) 晴

H1号住居址のプラン全体の清掃を行ない記録写真をとる。午後検出された全遺構の清掃をし、全体写真に収める。全体測量も同時に行なう。

これをもって作業の全工程を終え、器材を撤収する。

○10月10日～10月15日 遺物洗い及註記作業。

○10月16日～10月20日 遺物複元作業。

○10月21日～10月30日 遺物実測。

○S51年1月16日～1月31日 図面整理及遺物、遺構実測図のトレス。

○2月1日～2月27日 図版作成、原稿執筆、付表作成、編集。

(青木 幸男)

Ⅱ 遺 跡 の 環 境

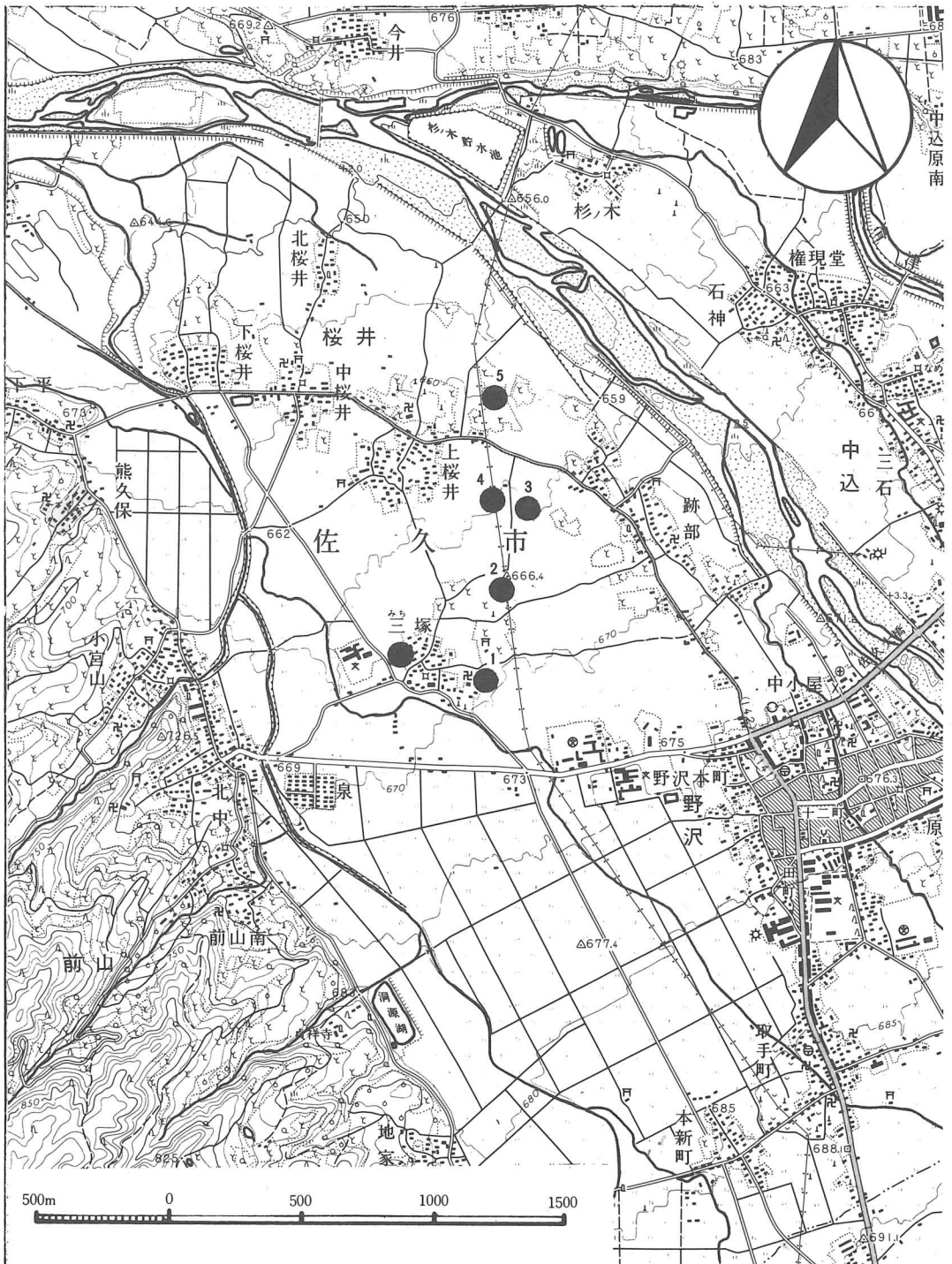
本遺跡は、佐久市大字三塚字鶴田に位置し標高は 668m を測る。千曲川の西岸に形成された带状微高地上には、昭和51年12月現在で5遺跡が発掘調査されており、その最西端にあたる。带状微高地はいくつもの谷地（旧千曲川の支流跡）が観察でき、带状微高地がいくつかに細分されている。本遺跡は、三塚三塚遺跡がある带状微高地上に存在する。付近には、第1表と第2図に表してあるように多くの遺跡が所在し、おもに古墳時代から平安時代にかけて住居址群が営まれている。特に最近の緊急発掘調査により一部であるが、三塚町田、跡部町田遺跡において古墳時代鬼高期の住居址群の面的な壊りがある程度確認されている。また、集落の一部分ではあるが上の城遺跡において鬼高期から平安時代の住居址群が検出されており、今後の資料検討から佐久地方の古墳時代から平安時代の集落構造が判明していだろう。（林 幸彦）

第1表 周辺遺跡一覧表

(cm)

NO.	遺 跡	住居址	形 態	規 模	主 軸 方 位	カマド	時 期	備 考
1	三塚三塚	H 1	方 形	^(東西) ^(南北) 720×720	N-27°-W	北	鬼高前~中	覆土内礫群
		H 2	隅丸方形	380×380	N-39°-W	北	国 分	
		H 3	(隅丸方形)	650×?	N-6°-W	北	鬼高前~中	
2	市 道	第1	方 形	470×462	N-5°-W	北	鬼 高 中	
		第2	不 整 方 形	360×355	N-85°-E	—	和 泉	
		第3	方 形?	—	—	—	鬼 高 中	
		第4	方 形	920×?	—	—	鬼 高 中	
		第5	方 形	400×?	—	—	不 明	
		第6	?	405×295	N-87°-W	—	国 分?	
		第7	長 方 形	850×?	N-14°-W	北	鬼高前~中	
		第8	長 方 形	455×510	N-13°-W	—	鬼 高 前	
		第9	方 形	443×410	N-9°-E	北	鬼 高 中	
		第10	不 明	?×365	—	—	鬼 高 前	

NO.	遺 跡	住居址	形 態	規 模	主 軸 方 位	カマド	時 期	備 考
3	跡部町田	H 1	不 整 方 形	410×380	N-6°-W	北	鬼 高 中	
		H 2	隅丸長方形	230×320	N-68°-E	東	〃	
		H 3	長 方 形	400×466	N-7°-W	北	〃	
		H 4	隅 丸 方 形	490×470	N-35°-W	北	〃	
		H 5	〃	390×400	N-3°-W	北	〃	
4	三塚町田	第 1	方 形	556×550	N-30°-W	北	〃	覆土内礫群



第2図 遺跡の周辺遺跡分布図

Ⅲ 層 序

三塚鶴田遺跡は、跡部町田・市道遺跡と同じく、千曲川西岸の带状微高地上に位置する。標高は、668m余を測り、三塚三塚遺跡より続く微高地は概ね平坦であるが、やや西方及び北方に傾斜している。本遺跡の約300m西方には、片貝川の侵蝕によって形成された段丘があり、それより西方は低位となっている。

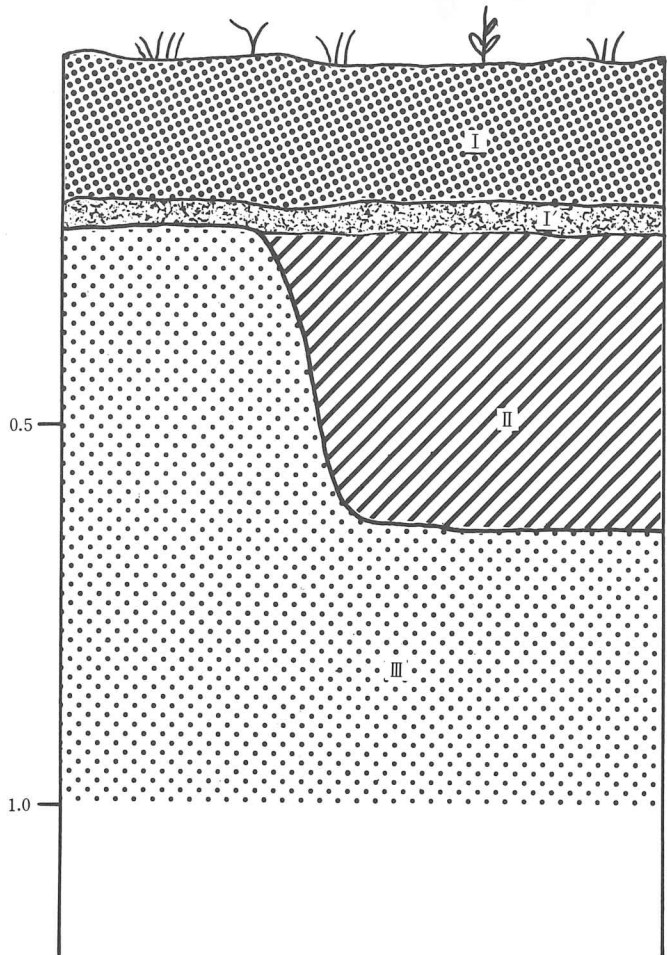
水田耕作による攪乱は、黄色砂質ローム層まで達しており、近接する三塚三塚市道遺跡等にみられた黒色土層は認められなかった。

第Ⅰ層、Ⅰ'層は、水田の耕作土及び床土である。Ⅰ層は灰褐色を呈し、Ⅰ'層は黄褐色を呈す。

第Ⅱ層は、遺構の覆土であり、遺構によっては黒色土層、黒褐色土層に細分できる。

第Ⅲ層は、跡部町田・市道遺跡と同様の黄色砂質ローム層であり、遺構はこの直上において確認された。遺物は包含されない。

(林 幸彦)



第3図 三塚鶴田遺跡層序模式図

IV 遺構と遺物

1 住居址

1) H1号住居址

遺構（第4～6図、図版二～三）

本住居址は3、4、5-D、3、4、5-Eのグリッド内において検出された。平面プランは東西400cm、南北470cmを計り、主軸方位はN-10°-Eを示す。壁高約10cm、西壁がやや膨らみ気味の方形プランで、長軸を東西にとる。床は北壁中央部から東西に涉ってたたきしめられた面をもつが壁体に近づくに従い軟弱となる。

本住居址内より検出されたピットは大小7個を数える。以下その規模、形状を述べてみたい。

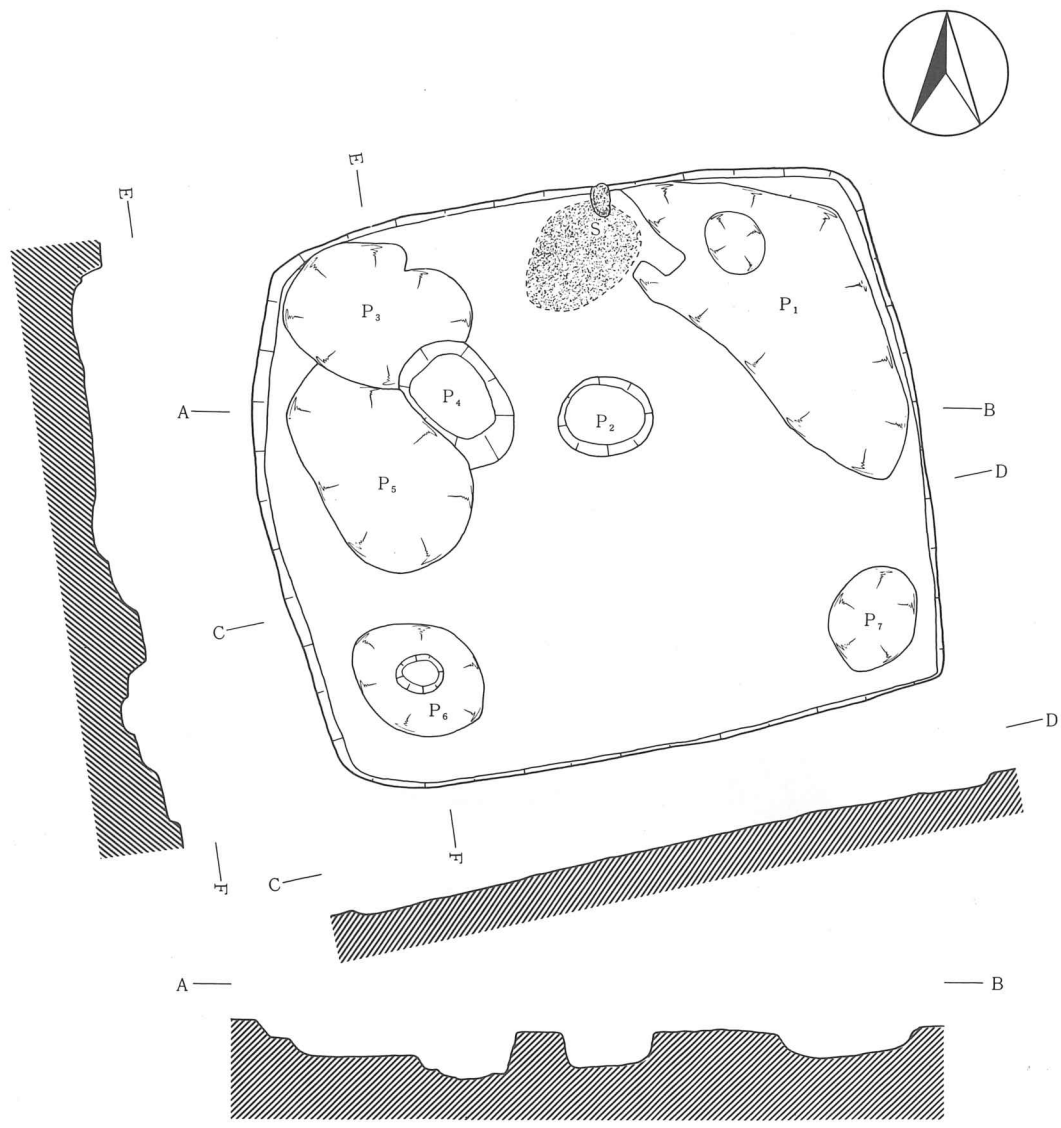
まずP₁は長軸310cm、短軸150cm、深さ20cmを計る不整な楕円形を呈す。P₂は長軸80cm、短軸65cm、深さ25cmを計る楕円形で住居址の中央よりやや北寄りに位置する。つづくP₃、P₄、P₅は北西コーナーにあって一つのまとまりを構成するが掘り込みの状態や立ち上りの面で差を異にしている。P₃は長軸150cm、短軸100cm、深さ10cmを計り長軸180cm、短軸105cm、深さ10cmを計るP₅と共通面が見られる。P₄は長軸110cm、短軸60cm、深さ35cmを計る楕円形で柱穴状を呈し、鍋底状⁽¹⁾を成すP₃、P₅とは区別される。P₆は長軸120cm、短軸90cm、最深部25cmを計る二段掘りの楕円形。P₇は長軸85cm、短軸65cm、深さ10cmを計る楕円形で鍋底状を呈す。

これらピット群はすでに指摘した通り概ね掘りの深い柱穴状（P₂、P₄、P₆）と掘りの浅い鍋底状（P₁、P₃、P₅、P₇）とに分類される。ピット群の性格⁽²⁾に関しては住居空間の在り方や伴出遺物との関連もあり、指摘の域にとどめ、今後の資料的増加を待ち検証を加えたい。

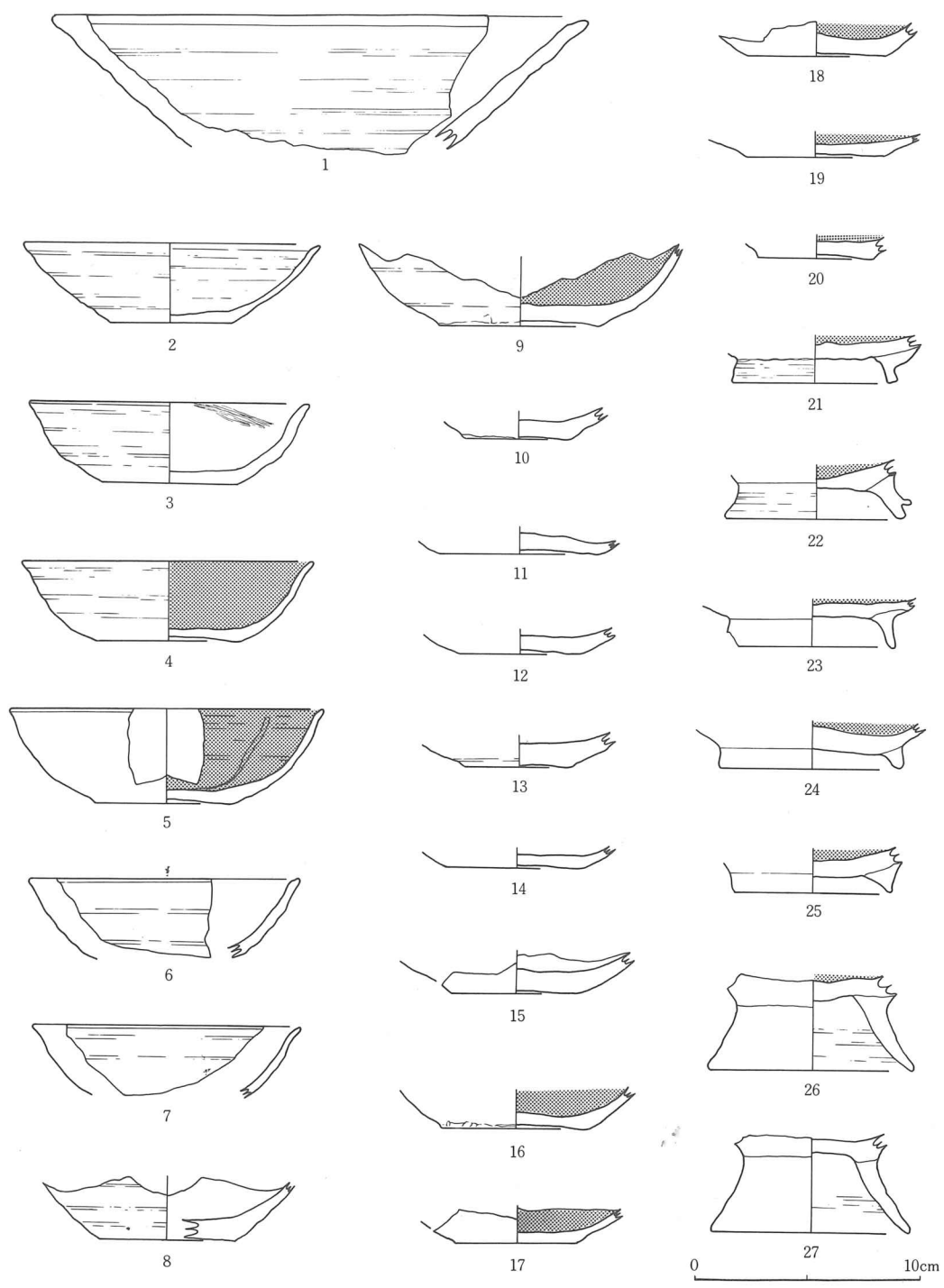
次にカマドであるが北壁中央部の壁面に袖石に使用されたと思われる人頭大の河原石があり、その周囲より焼土、炭化材の散布が認められている。ただし壁体を切り込んで煙道とした痕跡もなく、又火床も判然としない。総じて構築法、構造等を示す積極的根拠を欠くがカマドと考定されよう。

註1 「鍋底状」とは鋳物にみられる鍋の底部を形状的に表現するものでありスリ鉢状或いはテラス状との区別を考えている。

註2 P₃内より鉄滓、焼土群内より鉄鏝の出土がみられている（後出）。



第4图 H1号住居址实测图 (1:60)



第5图 H1号住居址出土遗物实测图(1:3)

遺物（第5～6図、図版三）

本住居址内における出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器である。以下その説明を述べたい。まず土師器であるが本住居址群中、最も多くの出土量をみている。図示出来得た土師器は合計31点（坏形土器20点、高台坏形土器11点）で、そのうち内面に黒色研磨を施した坏が16点と約半数を占めている。いずれもロクロ成形によるもので、底部糸切りを主体とし、底部糸切り後ヘラ削り調整されているのは5、9のみで数値的に少ない。甕形土器は覆土において少量検出されているが図示出来る資料はない。尚実測不可能なため図では表示されていないが明らかに鏝を有す鏝釜形土器が一点覆土より出土している。須恵器は破片数25点で実測可能なものはない。

灰釉陶器は総数25点でそのうち図示出来たものは7点を数える。32は壺の底部で内面にはヘラナデが施され、外面にはロクロ成形を残す。釉はすでに剥落し、全器形を知り得ない。33～38まで碗形（36のみ皿形）で、33、34の口縁部破片を除いていずれも台を付している。施釉は口縁部を中心とし底部近くまで及んでいるが底部には見られないのを特徴としている。台部は下半外面が内傾して先端が尖なもの（35、37、38）、方形を呈するもの（36）とに分けられる。

鉄器は40の有茎平根鎌が1点、北壁寄りの焼土群中より出土している。住居址内より鉄鎌が出土するケースは少なく、佐久市にあっては上ノ城遺跡H35号址に次いで二番目の所見といえよう。⁽¹⁾他に、鉄滓がP₃及び覆土より検出されておりピット群とも関連し注意される（前出）。

出土遺物における位置関係はカマド考定部を中心に北西、北東コーナーへの偏在が指摘される。特に、P₁、P₃からの集中的出土が多いのに対しP₂、P₆、P₇を結ぶ三角部からの出土率が少ないのは興味深い。

ま と め

本住居址は東西410cm、南北470cmを計測する方形プランで北壁中央部にカマドを有している。出土遺物にあっては、土師器、灰釉陶器の共伴がメルクマールとされ、須恵器が明らかに土器組成から欠落し始めている。⁽²⁾特に器形的には坏形、碗形がその主流を占め、甕形土器が副次的存在、になっていく傾向が看取される。そうした動向は本住居址出土、灰釉陶器の多くが東濃系に流入経路を求める所見と一致している。⁽³⁾

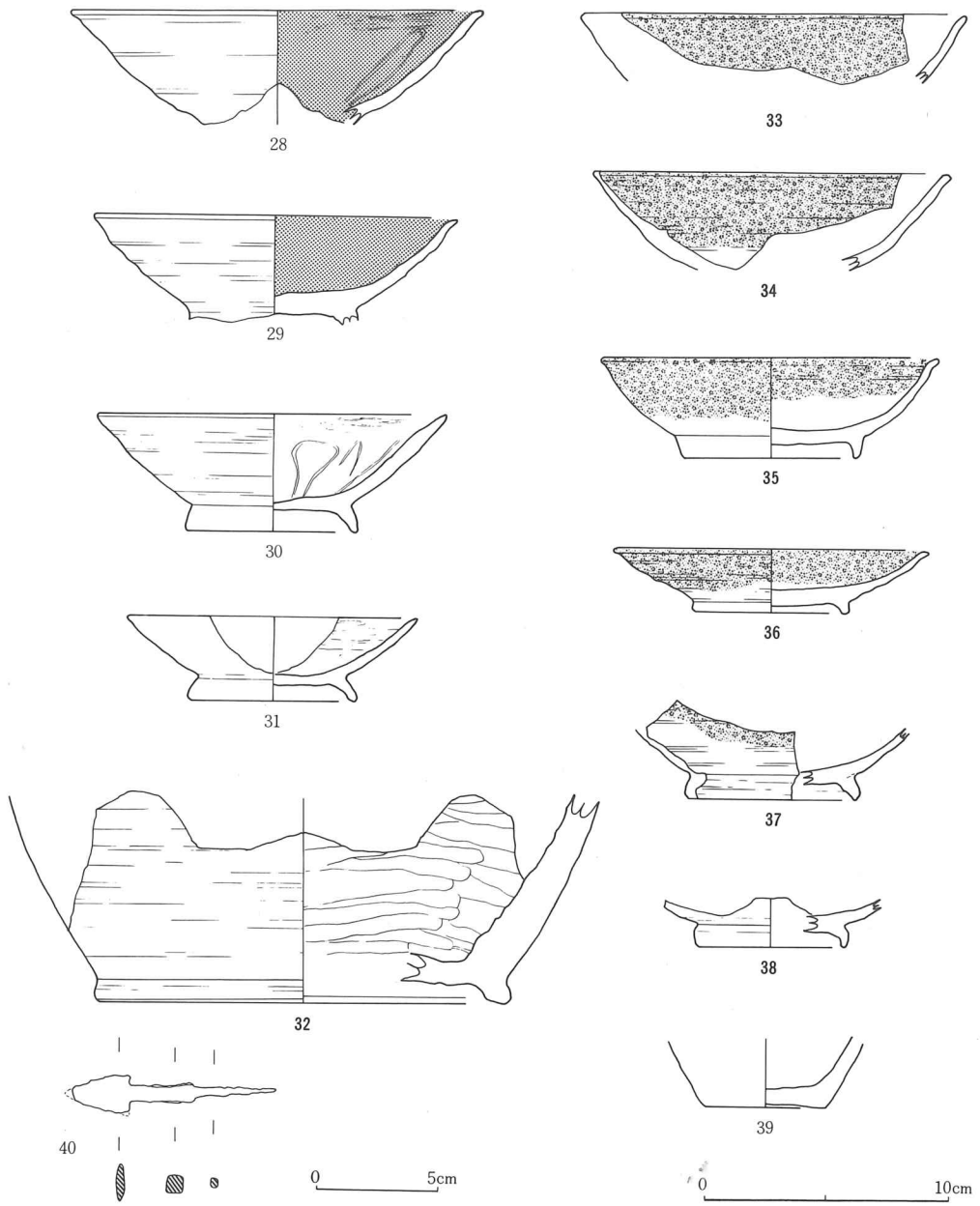
（青木 幸男）

註1 藤沢平治他「うえのじょう」佐久市上ノ城遺跡緊急発掘調査概報

佐久市教育委員会（昭和49年）

註2 森嶋 稔・笹沢浩「上水内郡誌、歴史編」（昭和51年）

註3 坂野和信氏の御教示による。



第6図 H1号住居址出土遺物実測図(1:3)

第2表 H1号住居址出土土器一覧表

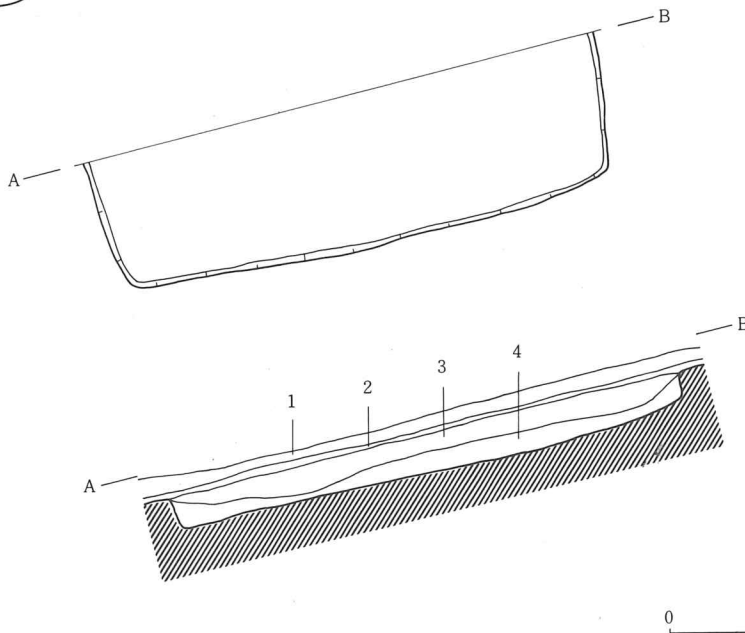
插图番号	器種	破片分類部位	実測分類	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
5-1	坏?	A22 口	F	(24.0) — —	口辺部外傾し、口厚部僅かに外反する。小片のため不明確であり、蓋の可能性もある。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調は黄褐色 II区出土
5-2	坏	A13 口 底	R	(13.0) 3.5 (5.5)	口辺部の器厚薄く、外傾する。底部の内側、中央部は凹んでいる。	ロクロ痕 糸切り底	ロクロ痕	色調は黄褐色 I区出土
5-3	坏	A13 口 底	R	(12.5) 3.5 6.0	口辺部外傾しつつ内湾する。	ロクロ痕 糸切り底	ロクロ痕	色調は黄褐色 II区出土
5-4	坏	A13 口 底	R	(13.0) 3.5 6.0	口辺部外傾しつつ内湾する。底部は僅かに上げ底。	ロクロ痕 糸切り底	ロクロ成形後、ヘラミガキ 内面黒色	色調は褐色 IV区出土
5-5	坏	A13 口 底	R	(14.0) 4.2 6.0	口辺部外傾しつつ内湾する。底部僅かに上げ底。底部と口辺部境の接合帯は明瞭である。	ロクロ痕。底部は糸切り後ヘラケズリ。	ロクロ成形後、ヘラミガキ 十字の暗文 内面黒色	色調は白褐色、胎土に砂粒を多く含む。 III区出土
5-6	坏	A22 口	F	(12.0) — —	口辺部外傾しつつ僅かに内湾する。	ロクロ痕	ロクロ成形後、ヘラミガキ 内面黒色	色調は白褐色 P ₁ 出土
5-7	坏	A22 口	F	(12.0) — —	口辺部外傾しつつ内湾し、口縁部短く外反する。	ロクロ痕	ロクロ痕	色調は黄褐色 砂粒を多く含む。 II区出土
5-8	坏	A22 底	R	— — (6.0)		ロクロ成形後一部ナデ。糸切り底。	ナデ	色調は赤褐色 P ₁ 出土
5-9	坏	A22 底	R	— — (7.5)	やや上げ底	ロクロ成形後一部ヘラケズリ。底部は糸切り後一部ヘラケズリ。	ロクロ成形後、ヘラミガキ 内面黒色	色調は褐色 底部に黒斑 II区出土
第5図10~27は残存少のため省略								
6-28	坏	A22	R	(17.0) — —	口辺部外傾し、口縁部極く僅かに外反する。 高台付とおもわれる。	ロクロ痕	ロクロ成形後ヘラミガキ 内面黒色	色調は黄褐色 口辺部一部黒斑 II区出土
6-29	高台坏	A22 口 底	P	(15.0) (4.0) 7.0	口辺部外傾し、口縁部短く外反する。 台部は欠損している。	ロクロ成形後ナデ	ロクロ成形後、ヘラナデ 内面黒色	色調は黒褐色 台部と垣部の接合部が明瞭。VI区出土
6-30	高台坏	A13 口 底	R	(14.0) 5.0 7.0	口辺部外傾し台部は内湾し台部端は丸味をおびる。台部は坏部に狭りこんで接合。	ロクロ痕、台部の貼り付け後ナデ。	ロクロ成形後、ヘラミガキ。暗文が施されている。 一部内面黒色	色調は黄褐色 一部に黒斑 P ₁ 出土
6-31	高台坏	A13 口 底	R	(12.0) 3.5 6.0	口辺部外傾化し、台部の先端は丸味をおびる。 台部は貼り付け。	ロクロ痕、台部貼り付け後ナデ。	ロクロ成形後、ヘラミガキ 内面黒色形磨	色調は褐色 IV区出土
6-32	灰釉壺	A22 底	R	— — (17.0)	台部は貼り付けで断面と底部において明瞭にうかがえる。	ロクロ痕	巾約1cm前後のヘラナデ	色調は白灰色 II区出土
6-33	灰釉堦	A22 口	F	(16.0) — —	口唇部外面端は角ばるが、内面は湾曲している。	ロクロ痕、一部に釉が残る。釉の範囲は口唇部より約3cmの巾。	ロクロ痕、一部に釉が残る。釉の範囲は口唇部より約3cmの巾。	色調は全体に白灰色 覆土内出土

6-34	灰 釉 境	A22 口	F	(15.0) — —	口辺部外傾しつつ内弯し、 口縁部ごく短く外反。	ロクロ成形後、口 唇部より約3cm灰 釉。	ロクロ成形後、残存 部の全体に灰釉。	色調は外面白灰色 内面薄濁褐色 覆土内出土
6-35	灰 釉 境	A13 口 底	R	(14.0) 4.2 8.0	口辺部外傾しつつ内弯し、 口縁部短く外反する。台部 はやや内弯し、台部の端は 尖っている。	ロクロ成形後、口 唇部より約3cm灰 釉。	ロクロ成形後、口唇 部より約2cm灰釉。	色調は外面白灰色 内面薄濁褐色 I区出土
6-36	灰 釉 皿	A13 口 底	R	(13.0) 2.6 6.4	口辺部外傾しつつ内弯し、 口縁部はごく短く外反する。 台部端は、細いが丸味をも つ。	ロクロ成形後、底 部近くまで灰釉。	ロクロ成形後、口辺 部のほぼ全体に灰釉。	色調は外面白灰色 内面薄濁褐色 II区出土
6-37	灰 釉 境	A22 底	F	— — (7.0)	台部は貼り付け。 台部端は細いが丸味をもつ。	ロクロ成形後、底 部近くまで灰釉。	ロクロ成形後、灰釉 一部残存。	色調は外面白灰色 内面白緑色、一部薄 濁褐色。I区出土

2) H2号住居址

遺構 (第7図, 図版二の2)

本住居址は7-B、7、8-Cグリットの水田床土下、第Ⅲ層より検出された。方位は北を取ると思われるが農道にはばまれ完掘をみていない。確認出来たプランの南辺400cm、壁高は約25cmを計る。床は軟弱で検出されたプラン内には付属施設をもたない。土層は北壁断面より観察され3層(炭化物を含む黒褐色土)、4層(黒色土)が覆土を形成する。



層序説明

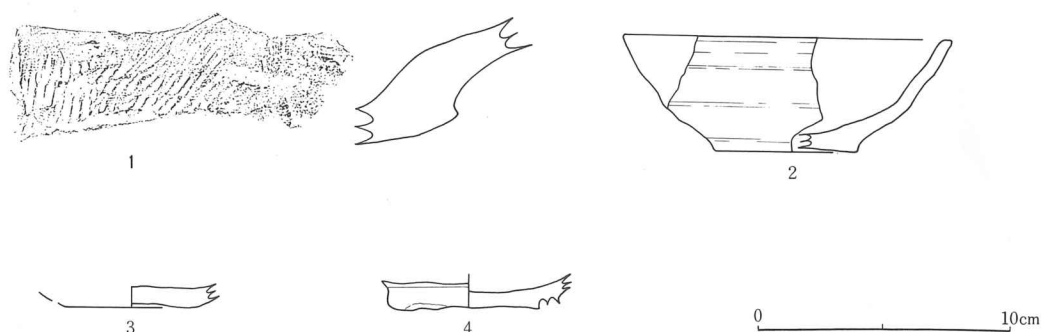
- 1層 灰色土層 (水田耕土) 全体層序の I
- 2層 黄褐色土層 (水田床土) " I'
- 3層 黒褐色土層 (炭材の細片
含む覆土) " II
- 4層 黒土層 (漆黒に近い
色を呈する) " II

第7図 H2号住居址実測図 (1:60)

遺物 (第8図)

本住居址内より検出された遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器の細片に限られ、実測可能な破片は4点であった。遺物の多くは全体層序のⅡ層(覆土上部の黒褐色土)より検出され、床面及び床面直上は少ない。1は須恵器の甕片であるが全器形を知り得ない。2～4までは土師器の坏形土器で、3、4には内面黒色の研磨が施されている。

破片のため数値的データに乏しいが、前述のH1号住居址出土土器と時期的に大過ないものと考えられる。



第8図 H2号住居址出土土器実測図(1:3)

第3表 H2号住居址出土土器一覧表

挿 番 号	器 種	破片分 類部位	実 測 分 類	法 量	器 形 の 特 徴	調 整 (内面)	調 整 (内面)	備 考
8-1	須 恵 器	B2 底	—	— — —	甕と思われるが、残存部微小のため不明確である。	叩き目	ナデ	色調は外面黒灰色。内面灰色で胎土は紫灰色を呈す。覆土出土
8-2	坏	A13 口 底	F	(13.0) 4.5 (6.0)	口辺部外傾しつつ、内湾する。底部付近ですぼまっている。	ロクロ痕	ロクロ成形後、ヘラミガキ	色調は外面黄褐色、内面灰褐色 床面出土
8-3	坏	A22 底	P	— — 5.0		ロクロ痕、糸切りの後一部ナデ。	内面黒色	色調外面は黄白色。覆土出土
8-4	高 台 坏	A22 底	R	— — 6.5	台部は貼り付け。	底部糸切り、台部接合の後ナデ。	内面黒色	色調外面明褐色 覆土出土

ま と め

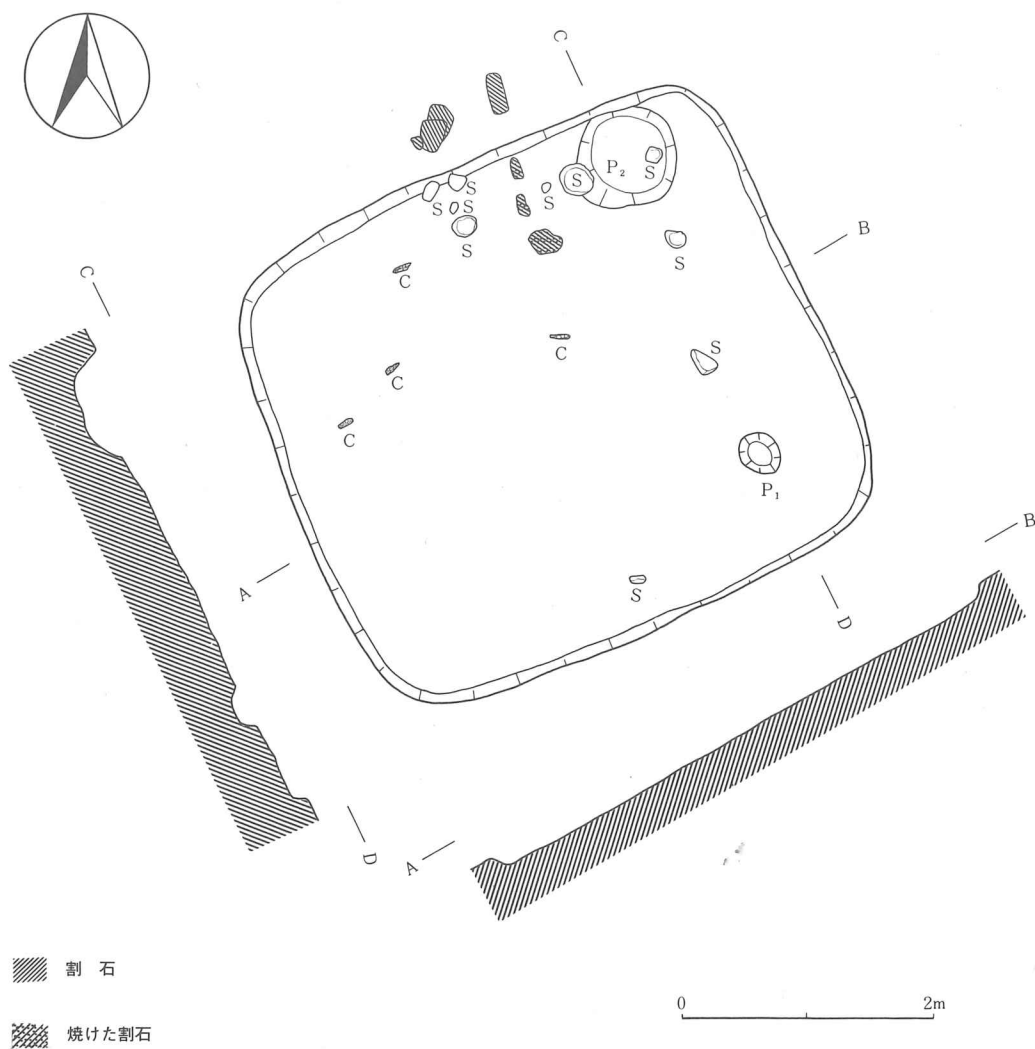
本住居址は前述の制約によりその全容を把握するまでに到っていない。速断を許さないが概ね方形を基本とするプランと考えられる。出土遺物も少量であり時期等を明確化し得ないが土師器の坏が多い点、灰釉陶器の伴出をみている点など近接する住居址群との共通点が多い。特に方位は北にあり本住居址群の特徴といえ、住居設計に伴う意識的配慮が瞥見される。(青木幸男)

3) H3号住居址

遺構 (第9図、図版四)

本住居址は、1-A・B、2-A・B、3-A・Bグリッドに位置し、確認は全体層序第Ⅲ層の上面においてなされた。カマドから西壁にかけて住居址の北側部1m前後がH4号住居址と重複している。重複関係は、本住居址のプランがH4号住居址との重複部において明確であり、層序の断面においても確認されたので本住居址が新しくなると判断した。H1号住居址の北東に位置する。

平面プランは、東西430cm、南北380cmの東西にやや長い方形を呈し、主軸方位はN-22°-W



第9図 H3号住居址実測図 (1:60)

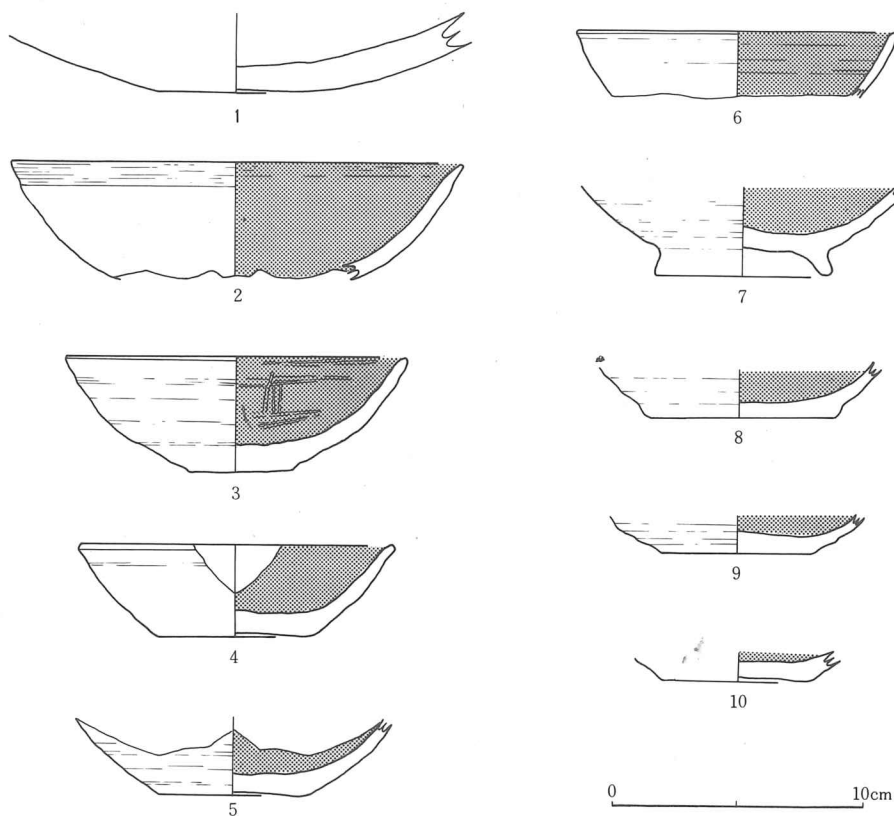
を示す。覆土は、1層で黒色を呈し焼土粒子及び炭化材を比較的多量に含む。

確認面からの壁高は、10～16cmを測る。壁は比較的急に立ち上がる。床面は全体層序第Ⅲ層を掘り込んで構築されており、壁ぎわがやや高くなっているほかはほぼ平坦である。局部的にかなり堅い面があり、明瞭な床面として検出できた。ピットは2個確認されている。P₁は長径40cm、短径30cmの楕円形を呈し、深さは10cmを測る。P₂はカマドの東脇に位置しほぼ円形で径85cmを測り、最深部は床面より20cmである。

カマドはすでに崩壊しており、その構築状態等は把握できないが、北壁中央部に焼土層や10個の割石（3個は明らかに火に遭っている）がみられることから、ほぼこの位置にカマドが存在していたと思われる。なお、割石は佐久平の他遺跡のカマドにも頻繁に使用されてる凝灰岩である。

遺物（第10図1～10、図版五の2）

本住居址の出土遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器がある。図示し得た土器は土師器9点、須恵器1点の計10点がある。その他に土師器破片266点、須恵器破片18点、灰釉陶器破片5点が



第10図 H3号住居址出土遺物実測図（1：3）

第4表 H3号住居址出土土器一覧表

挿 番 号	器 種	破片分 類部位	実 測 分 類	法 量	器 形 の 特 徴	調 整 (外 面)	調 整 (内 面)	備 考
10-1	須 恵 器 甕	A21 底	P	— — 6.0	底部は丸底気味の平底である。	叩き目		色調は内外面とも白灰色。 Ⅲ区床面出土
10-2	坏	A22 口	R	(18.0) — —	口辺部外傾しつつ緩く内湾する。器厚は口唇部にもけて薄くなる。	口縁部ヨコナデ	口辺部ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面白褐色 Ⅳ区覆土出土
10-3	坏	A13 口 底	R	(14.0) 4.5 4.0	口辺部外傾しつつ内湾する。底部との境ですぼまる。	ロクロ成形の後ナデ。底部糸切りの後ヘラケズリ。	口縁部横方向のヘラミガキ、底部近くは縦方向のヘラミガキ 内面黒色	色調は外面一部黄褐色で大部分黒色。 Ⅲ区床面出土
10-4	坏	A13 口 底	R	12.5 3.7 6.0	口辺部外傾し、器厚は底部中央にもけて肥厚する。	ロクロ痕 底部糸切り。	ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面薄赤褐色 Ⅲ区床面出土
10-5	坏	A22 底	R	— — 6.0		ロクロ痕 底部糸切り。	ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面白褐色。 Ⅲ区床面出土
10-6	坏	A22 口	R	(13.0) — —	口唇部ごく僅かに外反する。	ロクロ痕	ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面黄褐色。 口唇部黒色 Ⅰ区床面出土
10-7	高 台 坏	A22 底	R	— — 7.0	台部貼り付け、台部端は丸味をおびる。底部中央にふくらむ。	底部糸切り	ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面白褐色 P ₂ 出土
10-8	坏	A22 底	R	— — 7.5	底部と口辺部の接合帯が明瞭である。	ロクロ成形痕が明瞭。 底部糸切り。	ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面茶褐色 P ₂ 出土
10-9	坏	A22 底	R	— — 6.0	底部中央がふくらむ。全体に薄手である。	ロクロ痕、底部はヘラケズリによって糸切りを消去	ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面白褐色。 カマド東脇
10-10	坏	A22 底	R	— — 6.0		底部は糸切り	ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面茶褐色 カマド出土

出土した。1、3～6は床面、7・8はP₂内、9・10はカマド、2は覆土内よりそれぞれ出土し、図示以外の289の破片も床面ないしは覆土内からの出土である。

土師器は、甕形土器、坏形土器の2器種が知れ、供膳形態の坏形土器が大部を占める。2～10は内面黒色研磨の坏形土器で、破片の土師器中の坏形土器にあっても大部分が同様の内面黒色研磨されたものである。また、高台をもたず底部糸切りのものがほとんどで、わずか7の1点のみが低い高台を有し、坏形土器の底部破片にあっても同様に高台をもたないほうが圧倒的に多い。

須恵器は、1の大型の甕とおもわれるもの以外は全器形を知り得るものはなく破片も18点だけである。坏形土器と甕の胴部片がみられる。

灰釉陶器は、わずか破片が5点で碗または皿状のものが4点、H1号住居址の第6図32と同様とおもわれる台部片1点がある。

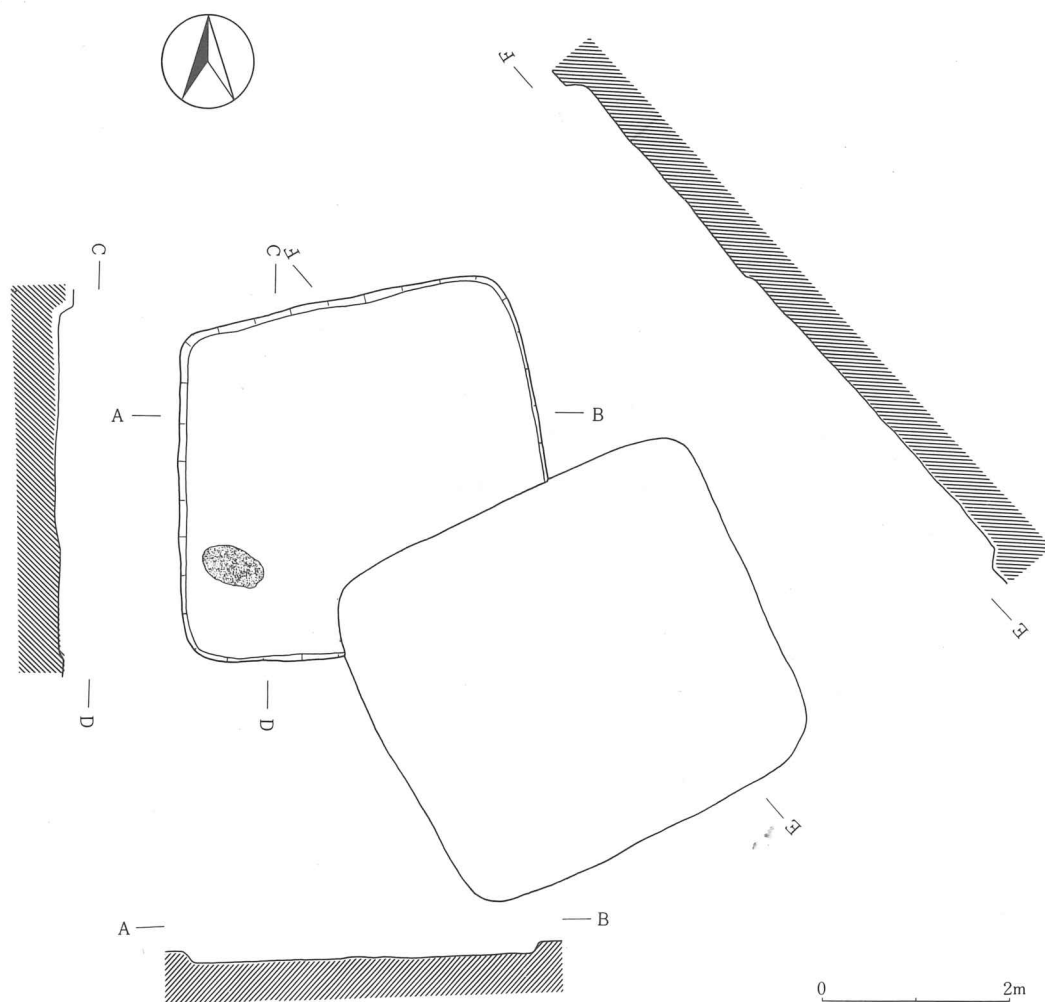
まとめ

住居址の形態は、カマドを中心とする主軸方向の南北が東西の長さより短く、この傾向は H1 および H4 号住居址と同じくする。出土土器は、供膳形態の土師器環形土器が主で、須恵器はごく少量である。また、灰釉陶器が伴出することも本住居址の大きな特徴であろう。(林 幸彦)

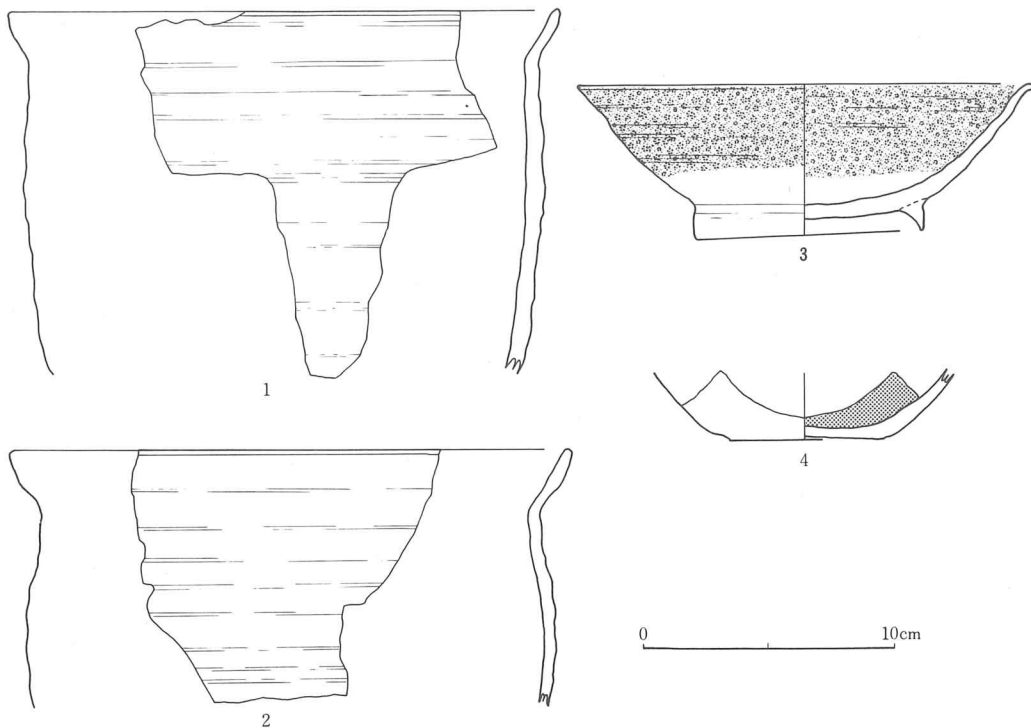
4) H4 号住居址

遺構 (第11図、図版五)

本住居址は、3-Z・A・B、4-A・B グリッドで全体層序の第Ⅲ層上面より確認された。南壁中央部から東壁中央部付近にわたって H3 号住居址と重複している。相方の住居址床面には、



第11図 H4 号住居址実測図 (1:80)



第12図 H4号住居址出土遺物実測図(1:3)

高低差があり、本住居址のほうが約5cmほど高くなっている。H3号住居址でも述べているとおり本住居址の重複部における床面がH3号住居址の構築のさい破壊されており、本住居址が先行することが明確である。

平面プランは、北壁350cm、西壁330cmを測り、南・東壁を一部欠くものの概むね台形を呈す。他の遺構同様水田の床土直下において確認されているために、また、床面が高い位置にあったため残存している壁高は、5~10cmと低い。床面は全面的に堅緻であり、西南隅がやや高いもののほぼ平坦である。西南隅には長径70cm、短径40cmの楕円形の範囲に焼土の散布が認められた。しかし、煙道部及びこの時期に一般的にみられるカマドに使用されている石等は、まったく検出されずカマドとしての性格を有するとは考えられない。その他ピット、同溝等付属施設は存在しない。

遺物(第12図1~4、図版五の2)

本住居址の出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器がある。図示可能なものは、土師器甕形土器、2点、坏形土器1点と灰釉陶器の埴形土器1点の計4点、その他土師器片71点、須恵器片1点、灰釉陶器片12点が出土している。1~4いずれもⅢ区の床面出土のものである。

第5表 H4号住居址出土土器一覧表

挿 番 号	器 種	破片分 類部位	実測 分類	法 量	器形の特 徴	調 整 (外面)	調 整 (内面)	備 考
12-1	甕	A22 口	F	(22.0) — —	口辺部外傾し、口縁部に至りやや内弯気味。胴部はほとんど丸味をもたない長胴であろう。	ロクロ成形の後胴下部付近縦方向のヘラケズリ。	ロクロ痕	色調は内外面黄褐色、口辺部に黒斑。 Ⅲ区床面出土
12-2	甕	A22 口	F	(22.0) — —	第12図1とはほぼ同様な器形であるが、口唇部は丸味がなく平坦である。	々	ロクロ痕	色調は、内外面とも茶褐色。 Ⅲ区床面出土
12-3	灰 釉 壺	A12 口 底	P	18.2 6.0 9.0	口辺部外傾し、口唇部短く外反する。口唇部は丸味をもつが、台部端は尖っている。	ロクロ痕、釉は口唇部より約5cmの巾にハケガケ。	釉はハケガケ。 はけの巾約3.5cm	色調は、内外面とも灰色。 Ⅲ区床面出土
12-4	坏	A22 底	R	— — 6.0		ロクロ成形の後ナデ。 底部糸切り。	ヘラミガキ 内面黒色	色調は外面黄褐色 Ⅲ区床面出土

1と2は残存部の形態から長胴を呈す甕形土器であろう。口辺部から胴上部には、ロクロ成形痕を顕著にとどめている。1の残存部下端には、ヘラケズリがうかがえる。4は内面が黒色研磨されている坏形土器である。この他の71片は、甕形土器の破片がもっとも多く、坏形土器は少量であり、内面黒色研磨が施されているものは約3割を占める。須恵器は、わずか1片のみで甕形土器の胴部片とおもわれる。灰釉陶器は、3の壺形土器がある。口唇部は短くそり反っている。台部の外側はやや内側にむけて底部より端に至り、端は薄く尖っている。台部の内側は弯曲して底部に続く。釉は内外面とも口唇部より約5cmの巾でハケガケされている。内面の底部に一部ぬらされており、ハケの巾がわかり約3.5cmを測る。他に12片の破片が出土されているが、大半は壺ないし皿形土器破片とおもわれる。2片は、小形の壺形を呈するものとおもわれ、うち1片は頸部～胴下部の約を残存しており外面全体に釉がかけられている。

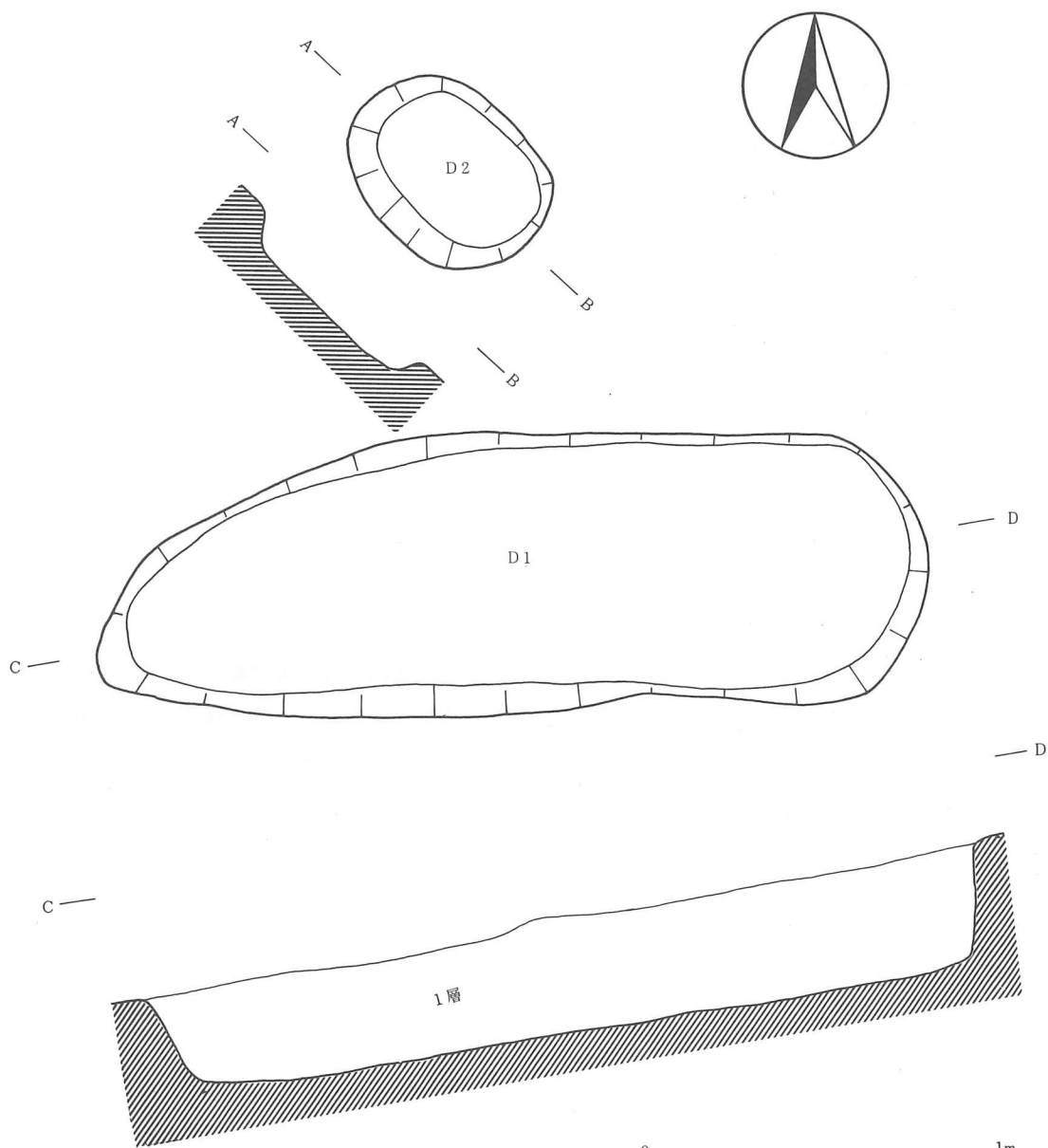
ま と め

前述したように本住居址には、カマドや柱穴等の付属施設がなんら認められず住居としての機能を有していたか不明なところである。出土遺物は、須恵器がごく少量で土師器が大半を占め、灰釉陶器が伴出するという点で本遺跡の他の住居址と共通するが、本住居址にあっては土師器の中で甕形土器が多量に出土している特徴がある。

(林 幸彦)

2 土 壇 (第13・14図、図版六)

土壇状遺構は、3基検出された。D1号土壇は6・7-Bグリッドに位置し、近接してD2号土壇、H2号住居址がある。長径235cm、短径80cmの楕円形を呈し、確認面から35cmを測る。長

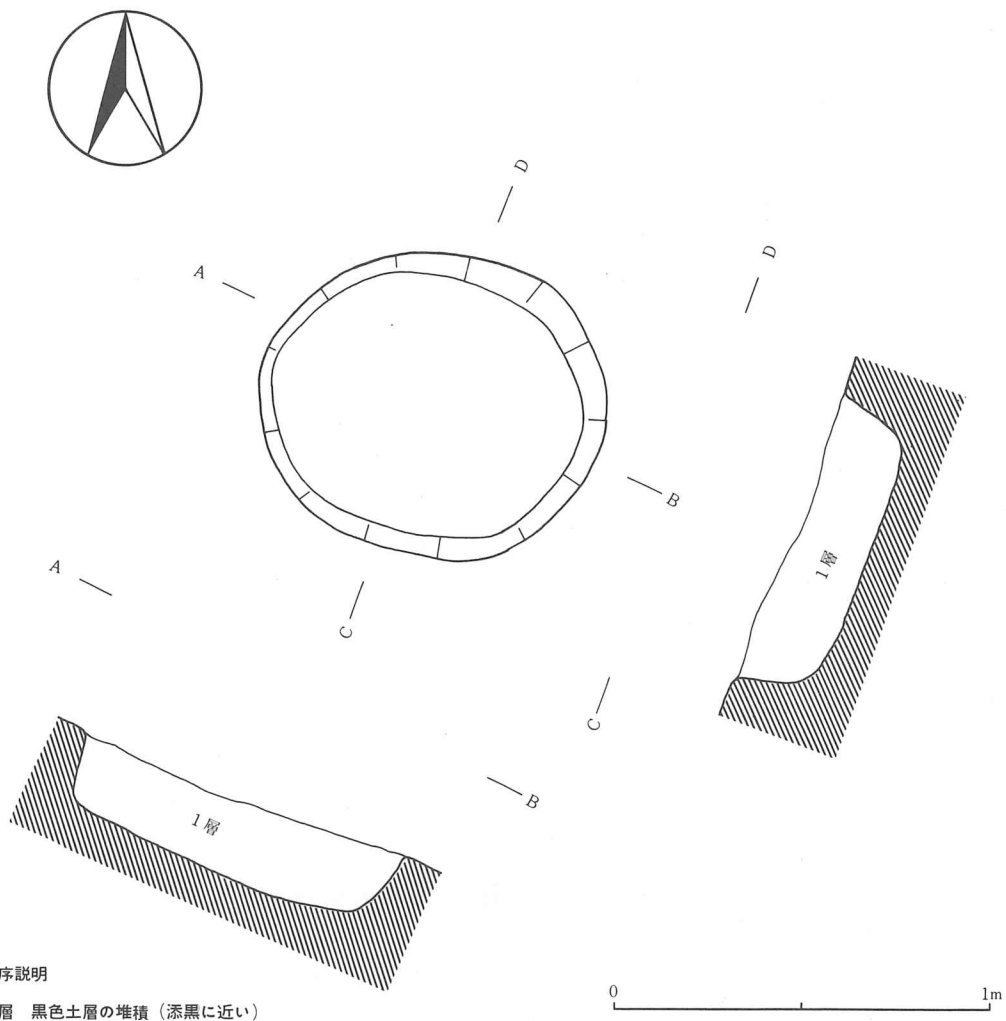


層序説明

1層 黒色土層で炭と少量のロームブロックを含む

第13図 D1・2号土壌実測図 (1:20)

軸はN-80°-Eを示す。覆土は黒色土層で炭化物や少量のロームブロックを含む。D2号土壌は7-Bグリッドより検出された。長径60cm×短径45cmの楕円形を呈し、長軸はN-45°-Wを示す。確認面からの深さは約10cmを測る。D3号土壌は、6-C・Dグリッドに位置し、長径95cm×短



層序説明
 1層 黒色土層の堆積（添黒に近い）

第14図 D3号土坑実測図（1：20）

径80cmの楕円形を呈し、長軸はN-75°-Wを示す。確認面より深さは約25cmを測る。覆土は1層で添黒色を呈す。

D 1～3号いずれも出土遺物は皆無であり、時期及び機能面に論及することは甚だ困難なことである。D 1号土坑の覆土の堆積状態は、炭化物や全体層序の第Ⅲ層のロームブロックが散布しており、人為的な堆積といえよう。しかしながらその性格の把握は遺存物の面からは追求できず今後の類似資料の分析検討によらなければならない。（林 幸彦）

V 総 括

三塚鶴田遺跡は、大規模な三塚遺跡群の西側部にあたっているが、今回の調査は緊急発掘調査のため限定された範囲であった。

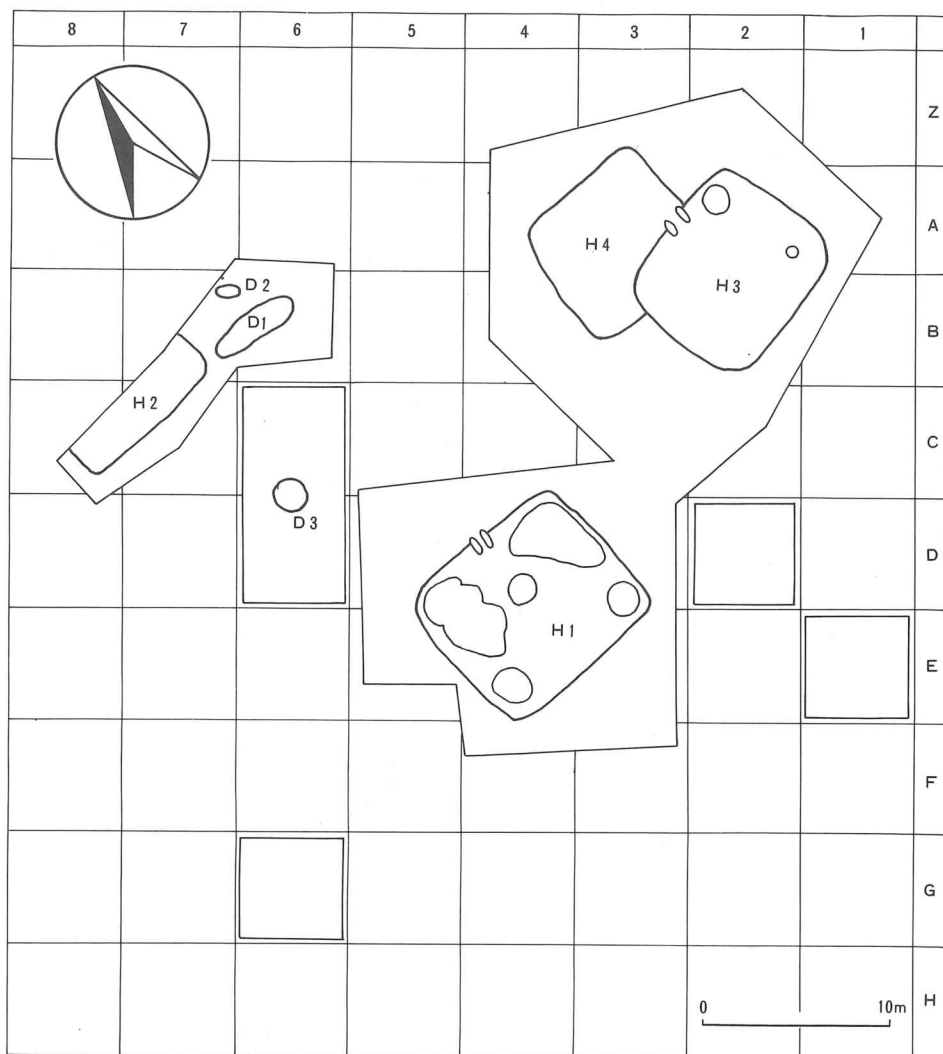
検出された遺構は、住居址4軒、土壇3基であり、出土した遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器がある。これらの土器は総じて国分期に比定される。

遺構

住居址は一部重複関係がみられ前記のように、H4号住居址がH3号住居址より先行して構築されている。平面プランは一様に東西にやや長い方形を呈し、主軸は4軒ともにN-10°~22°-Wの方位に入る。H1~3号住居址は、長辺が400cmを越える。特にH1号住居址の長辺は480cmを測る。H4号住居址のみ長辺が400cm以下で、350cmと小規模である。カマドはH1号住居址とH3号住居址にそれぞれ認められたが相方とも遺存状態は悪く、カマドの構築方法等は明確でない。H3号住居址において凝灰岩の割石が検出され、本遺跡でも佐久地方の他遺跡国分期のカマドに一般的にみられる石組のカマドが存在したであろうと想定される。さて、上屋構造に伴う柱穴の存在であるが、本遺跡も国分期の住居址が概して竪穴内から柱穴が発見されない例が多いこ

第6表 三塚鶴田遺跡住居址一覧表

遺構	平 面 プ ラ ン						壁高	カマド	柱穴	時期	備考
	形態	規 模				主軸方位					
		北壁	西壁	南壁	東壁						
H 1	方 形	470	410	480	410	N-10°-W	5 } 15	北	1	国分期	大小8個のピット。東西の壁がふくらむ。
H 2	方形?	—	(105)	400	(110)	—	20 } 25			〃	
H 3	方 形	420	380	430	380	N-22°-W	10 } 16	北	1	〃	
H 4	台 形	350	330	(160)	(220)	—	5 } 15			〃	



第15図 三塚鶴田遺跡遺構全体図 (1:200)

とに例外でなく、明確に柱穴とおもわれるピットは検出されなかった。竪穴内に土台的な材木があり使用したものであろう等々、⁽¹⁾いろいろな推考がなされているが、現状は資料に乏しく今後の好資料の出現を待つものである。

上述した本遺跡の住居址群は、これをもって一集落といえるものではないとおもわれる。よって集落構造等に詳しくは言及でき得ないので、ここでは周辺の国分期の住居址が確認されている遺跡に注目してみようとおもう。まず、本遺跡南東方約1400mに位置する儘田遺跡では、4軒の国分期の住居址のうちH2~4号住居址平面プランおよび規模、主軸方位の3点において、本遺跡の住居址群と様相を異にしている。すなわち、儘田遺跡の場合は平面プランが南北つまり主軸

方向に長辺を持っていること、規模がいずれも300cm前後の小形であること、主軸はN-0°~25°-Eを示すことが異なる点である。三塚三塚遺跡は東方約500mに近接している。国分期の住居址は1軒あり、1辺380cmの小形で正方形を呈している。

これら住居址の平面プラン、規模、主軸方位の各遺跡間での相違は、何に起因しているのだろうか。儘田遺跡は土師器、須恵器が出土しており、灰釉陶器はまだみられない。土師器の環形土器、須恵器の高台垣形土器等に古い様相が認められ⁽²⁾時期的には、本遺跡の住居址群より先行するものとおもわれる。三塚三塚遺跡は出土遺物が乏しくH2号住居址の時期的な（国分期は明らかである）把握はむづかしい。

このように本住居址群と周辺遺跡の住居址群との種々の相違は、灰釉陶器を伴出するかしないかによってある程度理解できよう。灰釉陶器を伴う住居址はこの地方においては限定されている。それは単に時期的なものに制約されているのか、または、一集落の灰釉陶器を伴う住居址が特定の意味あいを持つものであろうか？長野市の浅川西条遺跡⁽³⁾において国分期の住居址21軒が検出されており、灰釉陶器を伴うものが8軒ある。上・中・下部集落群と3集落に把握されており、いづれの集落群からも灰釉陶器を伴う複数の住居址が存在している。本住居址群も後述するようにH1号住居址とH3号住居址は、土器組成及び特徴等共通性が認められ同一時期に存在した可能性が強い。これらのことから現時点において佐久地方にあっても灰釉陶器を伴出する住居址は、ある時期に一般的に存在したものであるといえよう。

遺物

本遺跡は調査直前まで水田であった。沖積層の堆積が薄いため水田の床土直下は、黄色砂質ローム層および遺構覆土となる。出土遺物は、住居址内に集中してみられ、他のグリッド及び土壌からはみられず全体の量も少ない。

出土遺物は土師器が圧倒的に多く、少量の須恵器、灰釉陶器、鉄滓および鉄鏃1点がある。図示可能な土師器、須恵器、灰釉陶器の比率は約23.5：1：4で、灰釉陶器が須恵器を上回る。破片1483点に占める比率は、土師器、須恵器、灰釉陶器の順となるが、これは須恵器破片に大形の甕形土器が大半を占め、灰釉陶器は碗、皿形土器の小形のものが多い為である。個体数からいえばやはり各住居址とも灰釉陶器が須恵器を上回っている。

土師器の環形土器は内面黒色の炭素吸着研磨されたものと、それ以外のものと2大別でき、後者をA類とし、前者をB類とする。A・B両類共に高台を有すものと有さないものがある。煮沸

第7表 鶴田遺跡出土土器一覧表

遺構名及び遺構 上部グリッド名	個 体 数			土 器 片 数		
	土 師	須 恵	灰 釉	土 師	須 恵	灰 釉
H 1号住居址 5・4・3 - C・D・E	32(31) —	— —	7 —	994 105	26 15	20 6
H 2号住居址 7・8 - B・C	3(3) —	1 —	— —	47 —	8 —	1 —
H 3号住居址 1・2・3 - A・B	9(9) —	1 —	— —	266 —	18 —	5 —
H 4号住居址 3・4 - Z・A・B	3(1) —	— —	1 —	71 —	1 —	12 —
D 1 号 6・7 - B	— —	— —	— —	— —	— —	— —
D 2 号 7 - B	— —	— —	— —	— —	— —	— —
D 3 号 6 - C・D	— —	— —	— —	— —	— —	— —
合 計	47(44)	2	8	1,483	68	44

- 1) 個体数は、実測可能なものに限った。()内は環形土器の個数。
- 2) 土器片数は、明らかに同一個体と判別できたものもそれぞれ数えた。

形態の甕形土器は、2点実測可能でH 4号住居址より出土しているが他の住居址では、小破片が少量認められている。罍釜片はH 1号住居址より1点みられる。

H 1号住居址は、環形土器が32点出土しておりA類13点うち高台環2点、B類18点うち高台環9点となる。高台垣はB類に多くみられ、高台は1cmがもっとも多く3cmと高いものも1点ある。両類の底径であるが、A類の高台を持たない糸切り底のものは、4.5cm～6.0cmが一般的で、高台環は7cmを測るものがある。B類にあつては高台を持たないものが5.0cm～6.0cmの範囲にあり、6.0cmが大勢を占め、高台環はほとんどが7cmで8cmを測る大形のものもある。つまり、高台環は意識的に高台を持たない環形土器よりも比較的大形に成形されている⁽⁴⁾。煮沸用の甕形土器は口辺部破片がわずか数片みられ、罍釜の破片も1点出土している。

H 3号住居址は、H 1号住居址と同様環形土器が大半を占める。図示した9点の他破片においても約20点近い個体がみられる。9点ともすべてB類に属し、底径は高台環が7cm、高台を持たぬものは6cmに集中しており、H 1号住居址と同一様相である。甕形土器片も3個体がみえる。

H 4号住居址は唯一の図示でき得た甕形土器2点が出土している。個体の明確なものは他に2点ある。

須恵器は各住居址から出土量が非常に少く、坏形土器はH3号住居址に破片で3個体がみられるだけで、他はすべて甕形土器片である。本遺跡の住居址において須恵器の供膳形態である坏形土器は、土器組成から消滅しているといえる。雍形土器破片もごく少量である。

逆に灰釉陶器は佐久地方にあっては散発的に認められてる程度であるのに、本遺跡では⁽⁵⁾図示可能なもの8点の他に、明確に個体を確認できるものが13個体ある。器種は長頸瓶、埴、皿形土器がある。特にH1号住居址からは、図示したもの7点と個体が明確なもの7点と多量にある。供膳形態の埴、皿形土器が大半を占める。第6図35・36は埴切形で口辺部の上部のみに釉がツケがけされている。高台は35が尖っており、36は方形を呈す。いずれも東濃系のものである。⁽⁶⁾H2号住居址からは埴(皿)状の口辺部1点、H3号住居址からは瓶の台部片と埴(皿)状の口辺部がそれぞれ1個体ずつ出土している。H4号住居址からはH1号住居址につぐ量が出土し、大形の埴形土器、他に埴、瓶形土器の破片がある。第12図3は大形であり、高台は尖っている。釉は巾約3.5cmほどのハケがけがうかがえる。⁽⁷⁾

以上のように、供膳形態は土師器の坏形土器が大半を占める傾向があり、須恵器は皆無に近い。煮沸形態としては、土師器の甕形土器がH3号住居址にみられる他は、微量である。須恵器は確実に減少し、灰釉陶器が増加している。これらの傾向はH1号住居址とH3号住居址に顕著に認められる。

本遺跡住居址群は、出土遺物が前述のように供膳形態の須恵器がほぼ消滅し灰釉陶器が出現し土師器坏形土器にあってはB類が大半を占めるものの、A類の高台坏もみられること、国分期に一般的にみられる住居址の特徴がみられる等から、平安時代中期に位置付られよう。

今回の発掘調査は限定された範囲のため上記の住居址群が一集落の中でどのような性格をもち機能していたかは不明な点が大である。しかし、佐久地方で少数の知見であった灰釉陶器を伴出する時期の住居址が検出され前述してきた所見が得られたことは、大きな成果であったといえよう。今後近隣の資料との細部にわたる考究、また、文献資料との綿密な照合のもとに集落構造、経済的基盤が究明されることが問題となろう。(青木 幸男、林 幸彦、藤沢 平治)

註1 米山一政・小林孚 『浅川西条』 長野市教育委員会 昭和51年 森嶋稔・笹沢浩 『上水内郡誌歴史編』 昭和51年

註2 土師器は器高が5.6cmと深く、須恵器にあっても口径と底径が大差なく、笹沢浩氏が『上水内群誌歴史編』 昭和51年において、坏形土器の器高が4.0cm以上のものを善光寺平第5様式古に、4.0cm以内のものを同第5様式中に分類している。

- 註3 米山一政・小林孚 『浅川西条』 長野市教育委員会 昭和51年
- 註4 米山一政・小林孚 『浅川西条』 において同様な所見が得られている。
- 註5 発掘調査された遺跡では、上の城遺跡においては比較的多量に出土している。が、発掘調査された遺跡ではこの他にない。
- 註6 坂野和信氏の御教示による。いずれも東濃系で35の埴形のもものが10世紀後半に、36の皿形が10世紀中頃に位置づけられるという。
- 註7 坂野和信氏によれば、美濃系で10世紀後半の特徴を有すものという。

引用参考文献

- オ 大場磐雄・坂本太郎 昭和31年 『信濃史料 第1巻 上・下』 信濃史料刊行会
- サ 笹沢浩・森嶋稔 昭和51年 『上水内郡誌歴史編』 上水内郡誌編纂会
- フ 藤沢平治 昭和49年 『上の城遺跡調査概報』 佐久市教育委員会
藤沢平治 昭和49年 『三塚』 佐久市教育委員会
- モ 森嶋稔 昭和46年 『長野県佐久市野沢平儘田遺跡緊急発掘調査報告』 佐久市教育委員



遺跡全景（南方より）

三塚鶴田遺跡は、長野県佐久市大字三塚鶴田に所在する。前方に見えるのは、桜井の集落であり、その向こうには湯川層に覆われた中込原が一段高く存在する。右手よりわずかに張り出しているのは平尾富士の山塊である。晴れた日には前方正面に雄大な浅間山が展望できる。

本遺跡は千曲川の西岸に形成された帯状微高地上にあり、取出から桜井にかけて分布する弥生～古墳・歴史時代の遺跡の中で片貝川寄りに存在しており、西方約 250m には片貝川の浸蝕による段丘が観察できる。

周辺には三塚町田、三塚三塚、三塚市道、跡部町田、上桜井北遺跡が存在し、古墳時代中期～後期及び平安時代の住居址群が検出されている。



1 H1号住居址全景（南方より）



2 H2号住居址全景（西方より）



1-2



1-35



1-3



1-36



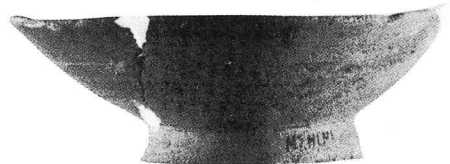
1-4



1-32



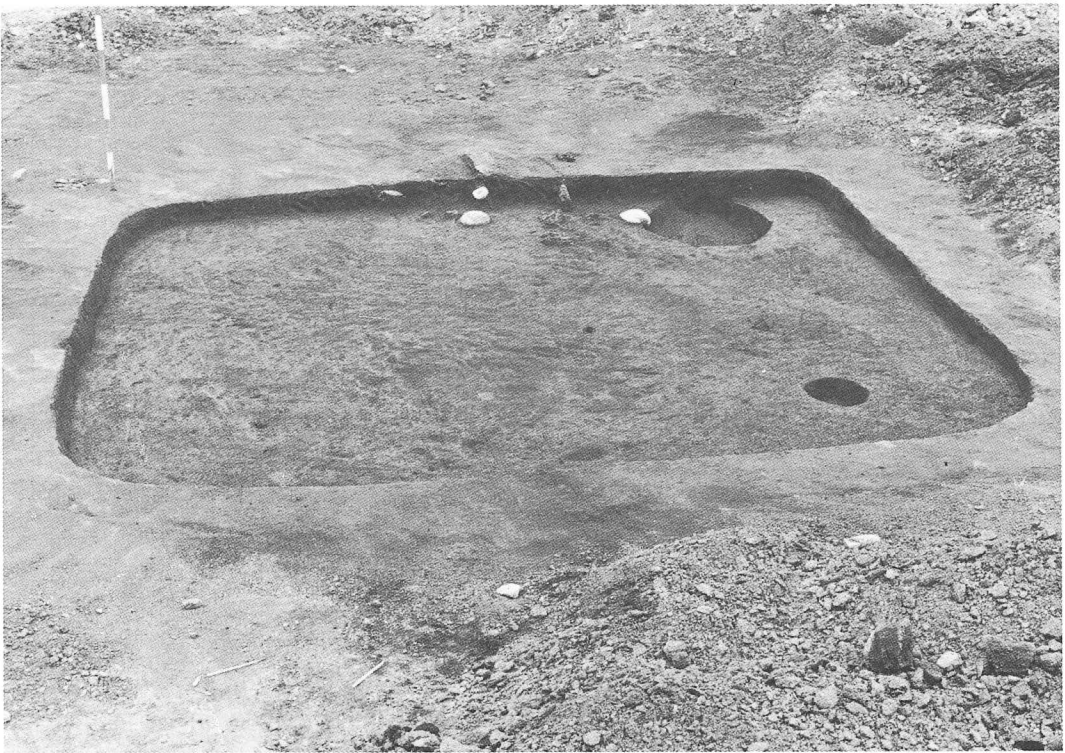
1-29



1-30



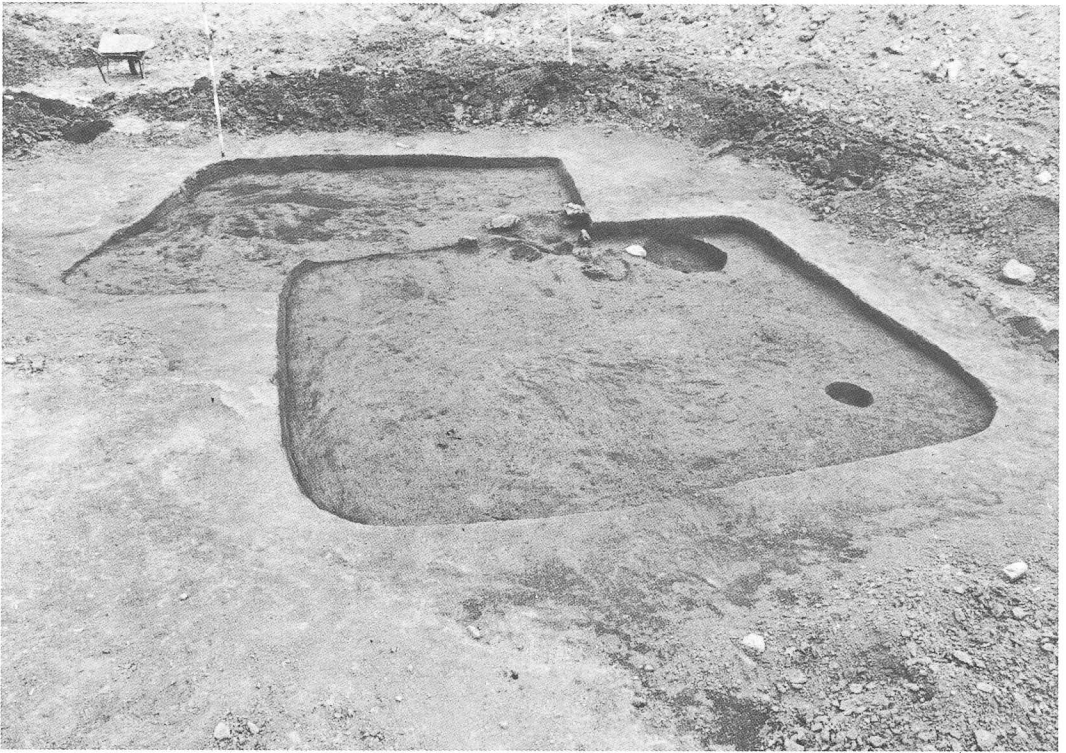
1-40



1 H3号住居址全景（南方より）



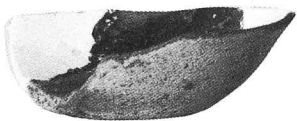
2 H3号住居址カマド（南方より）



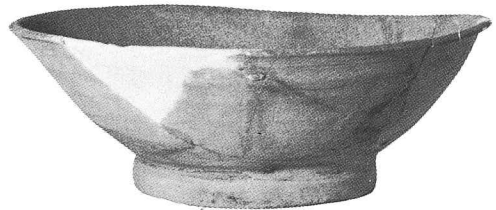
1 H4号住居址全景（南方より）



3-3

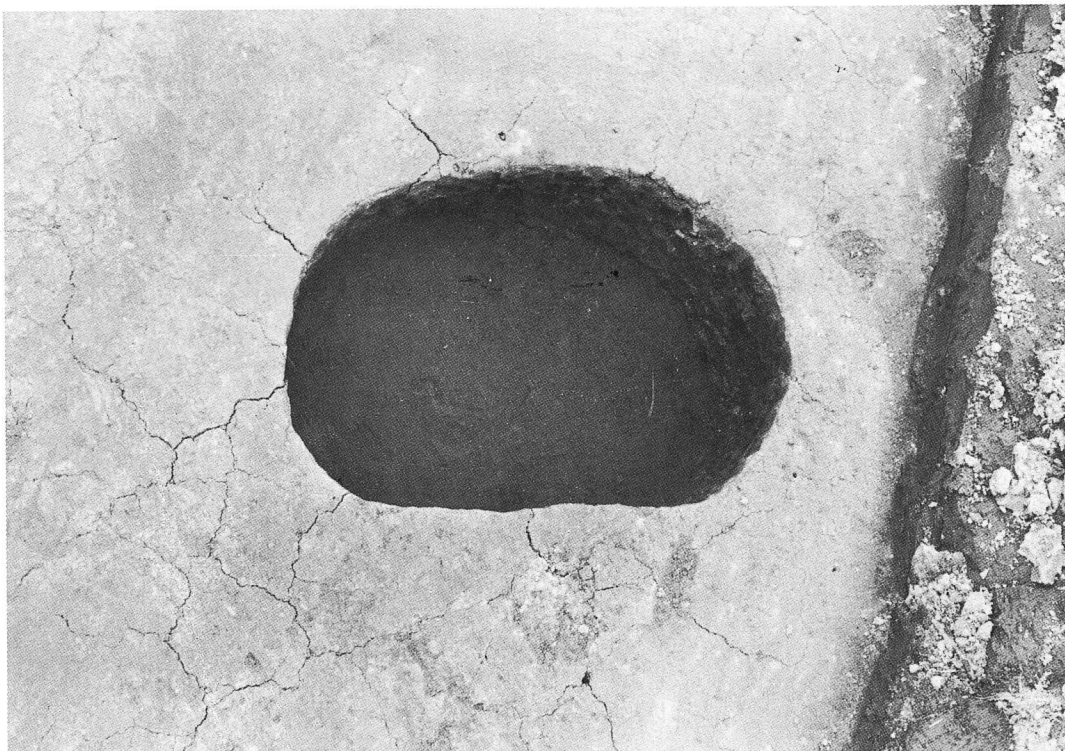


3-4

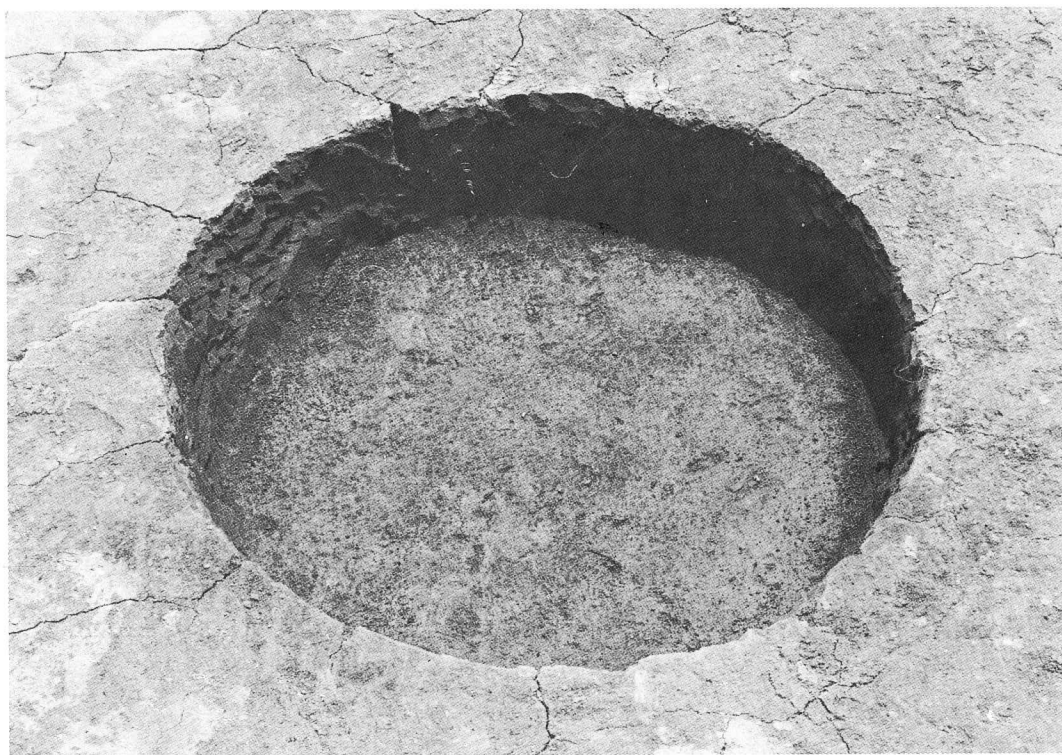


4-3

2 H3・4号住居址の出土遺物



1 D2 土坑全景



2 D3 土坑全景



1 発掘調査スナップ



2 発掘調査スナップ

長野県佐久市三塚鶴田遺跡

昭和 51 年 3 月 発行

編集者 三塚鶴田遺跡発掘調査団

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社 佐久印刷所